

勝賀城跡Ⅱ

1980・3

高松市教育委員会

序

勝賀城は、讃岐の中世史を考えるうえで、欠くことのできない貴重な歴史的遺産です。

同城跡につきましては、昨年度と今年度の2か年にわたり調査を実施し、その結果、幸いにして、県下に例をみないほどの城郭遺構を確認することができました。これにもないまして、今後、埋もれている城主香西氏の資料についても調査・収集してまいりたいと考えています。

前年度発刊の報告書に引続く本報告書が、わずかながらでも城郭の研究と文化財の保護のために役立つことを願うものです。

つきましては、関係各位のご協力によりまして、この貴重な城跡「勝賀城」の保存・顕彰に、なおいっそう力を注いでまいる所存です。

調査にあたり、地元ならびに関係各位に、ひとかたならぬご援助をいただきましたことに対して、深く謝意を表します。

昭和55年3月

高松市教育委員会

教育長 伊藤栄四郎

例 言

1. 本書は、高松市教育委員会が昭和54年度の国庫及び県費補助を得て実施した中世讃岐の豪族、香西氏の牙城であった勝賀城跡の第二次調査に関するものである。
2. 本城跡の所在地は高松市鬼無町、香西西町、植松町、中山町に跨る勝賀山山頂部一帯である。
3. 本事業は、昭和53年度より開始され（第一次調査）、その時は城跡全体の地形測量と本丸跡の状況を把握する試掘調査を行った。また勝賀城跡と関連のある香西氏ゆかりの周辺主要城跡を踏査し、その概要を報告した。
4. 本年度の調査は、第一次調査の成果を踏まえ、主として二の丸跡を対象にして、発掘調査及び石墨等の測量調査を行った。また前回に引き続き周辺主要城跡も踏査し、特に黄峰^{おみね}城跡については遺構及び地形の測量図を作成した。
5. 調査の期間は、勝賀城跡については昭和54年10月29日より同11月30日まで、黄峰城跡については昭和54年12月17日より同55年1月7日までである。
6. 現地調査は、主として香川県教育委員会文化行政課副主幹、松本豊胤の指導のもと寒川知治、藤井雄三が担当したが、今回も地元鬼無町佐料の有志から多大の協力を得た。
7. 本書の執筆は、「藤尾城と宇佐神社について」を松浦正一、「香西氏年譜」を木原溥幸が分担したほかは、寒川知治が担当し、編集も併せ行った。

事業参画者

松浦 正一（元県文化財保護審議会委員）
木原 溥幸（香川大学教育学部助教授）
松本 豊胤（香川県教育委員会文化行政課副主幹）
寒川 知治（ ” 技師）
上里 文麿（高松市教育委員会文化振興課長）
豊島 英夫（ ” 文化振興課長補佐）
伊藤 憲二（ ” 文化振興課員）
藤井 雄三（ ” ” ）

事業協力者

勝賀史談会 四国学院大学生
神崎 数義 大西 郁代
小林 明治 加藤美智子
小林 仁 佐藤加代子
小林 孝儀 中川 範子
泉保 繁一 星野 佳美
泉保 信男 宮内 浩美
泉保 政信
北条 政男他

本文目次

I 城跡の概要	1	IV 出土遺物について	33
II 調査の経過	3	V 周辺主要城跡の概況	35
1. はじめに	3	1. 植松城跡の概況	35
2. 第一次調査	3	2. 中山城跡の概況	36
3. 第二次調査	4	3. 黄峰城跡の概況	37
III 調査について	7	4. 亀水城跡の概況	40
1. 調査区の設定	7	5. 鬼無城跡の概況	40
2. 第I調査区	8	6. 室山城跡の概況	41
3. 第II調査区	10	VI おわりに	42
4. 第III調査区	12	VII 香西氏年譜	45
5. 石塁(石垣)について	12	VIII 藤尾城と宇佐神社について	55
6. 井戸跡推定地の調査	14		

挿図目次

第1図 本丸土塁を三の丸跡より望む	1	第21図 II-3 トレンチ実測図	21
第2図 勝賀城跡と周辺主要城跡	2	第22図 II-A //	22
第3図 第一次調査試掘風景	4	第23図 II-B //	22
第4図 勝賀城跡測量図	5	第24図 第III調査区実測図	23
第5図 第二次調査発掘作業風景	8	第25図 III-1 トレンチ実測図	25
第6図 本丸土塁裾部より検出された石群	9	第26図 III-2 //	25
第7図 コ字形石組み上面平坦部	10	第27図 第II調査区東辺石塁実測図	27
第8図 第III調査区試掘状況(南より)	12	第28図 第II調査区北辺石塁実測図	27
第9図 第II調査区東辺石塁試掘状況	13	第29図 第II調査区西上辺石群実測図	27
第10図 二の丸跡西部鉤形に曲る石列	13	第30図 第II調査区東辺石塁試掘部実測図	27
第11図 二重目土塁喰違虎口	14	第31図 第III調査区東辺石塁実測図	27
第12図 井戸跡推定地発掘部分実測図	15	第32図 二の丸跡西部実測図	29
第13図 第I調査区実測図	16	第33図 二の丸跡西部石塁実測図	31
第14図 I-1 グリッド実測図	17	第34図 土師質土器実測図	34
第15図 I-2 //	17	第35図 天正年間香西氏居城古地図	35
第16図 I-3 //	18	第36図 植松城跡現況図	35
第17図 I-4 //	18	第37図 中山城跡近傍	37
第18図 第II調査区実測図	19	第38図 黄峰城跡測量図	38
第19図 II-1 トレンチ実測図	21	第39図 本丸土塁を南より望む	39
第20図 II-2 //	21	第40図 室山城跡概略図	42

図 版 目 次

<p>図版 1 (1)空堀調査前全景……………60 (2)同調査後全景……………60 (3)Ⅰ-1調査区発掘作業風景……………60</p> <p>図版 2 (1)本丸土塁崩壊部分……………61 (2)同裾部列石検出状況……………61 (3)同土層序(左右の土質の違いに注意)……………61</p> <p>図版 3 (1)土塁先端部石組み……………62 (2)Ⅰ-2・3調査区試掘状況 (北西より)……………62 (3)同(西より)……………62</p> <p>図版 4 (1)コ字形石組み調査前全景……………63 (2)同調査後全景……………63 (3)同下部(南より)……………63</p> <p>図版 5 (1)Ⅱ調査区の設定(南より)……………64 (2)同第1層除去後全景(南より)……………64 (3)同調査終了状況(北より)……………64</p> <p>図版 6 (1)Ⅱ-1調査区試掘状況……………65 (2)Ⅱ-A調査区試掘状況……………65 (3)Ⅲ-1・2調査区試掘状況 (北より)……………65</p> <p>図版 7 (1)遺物出土状況(Ⅱ-2調査区)……………66 (2)同(Ⅱ-2調査区)……………66 (3)同(Ⅲ-1調査区)……………66</p> <p>図版 8 (1)Ⅱ-1調査区土層序……………67 (2)Ⅱ-A調査区土層序……………67 (3)埋め戻し作業風景……………67</p> <p>図版 9 (1)本丸内井戸跡推定地……………68 (2)同底部……………68 (3)同発掘状況……………68</p> <p>図版 10 (1)Ⅱ調査区西上辺の石群……………69 (2)同東辺の石塁……………69 (3)同北東隅の石塁……………69</p> <p>図版 11 (1)Ⅱ調査区北辺の石塁(北より)……………70 (2)Ⅲ調査区東辺の石塁(東より)……………70 (3)二の丸西部の石塁(西より)……………70</p>	<p>図版 12 (1)二の丸西部の石塁(北より)……………71 (2)二の丸二重目土塁にみられる 腰巻石垣(第33図)……………71 (3)同(第33図)……………71</p> <p>図版 13 (1)二の丸二重目土塁にみられる 腰巻石垣(第33図)……………72 (2)二の丸二重目土塁にみられる 腰巻石垣(第33図)……………72 (3)同外側部分……………72</p> <p>図版 14 (1)佐料城跡に残る堀跡……………73 (2)作山城跡頂部平坦面……………73 (3)藤尾城跡(現・宇佐八幡宮)……………73</p> <p>図版 15 (1)芝山城跡を南より仰ぐ……………74 (2)植松城跡(西より)……………74 (3)袋山(鬼無城跡推定地)を 勝賀山より望む……………74</p> <p>図版 16 (1)中山城跡の堀東部……………75 (2)同西部(中央部埋立て)……………75 (3)同南側石垣……………75</p> <p>図版 17 (1)黄峰城跡南端削平地……………76 (2)同所にある矩形石組み……………76 (3)同所上部の石塁……………76</p> <p>図版 18 (1)黄峰城跡の西側石塁……………77 (2)同東側石塁……………77 (3)同石塁南東部……………77</p> <p>図版 19 (1)黄峰城跡の西側石塁……………78 (2)同本丸土塁違虎口……………78 (3)同北端群石部……………78</p> <p>図版 20 (1)~(3)備前焼甕片……………79 (4)巻貝……………79 (5)土師質鉢……………79 (6)土師質土鍋……………79 (7)土師質小皿……………79 (8)土師質甕……………79 (9)瓦片(?)……………79</p>
--	---

I 城跡の概要

勝賀城跡は、高松平野の北西に聳える勝賀山（標高 364 m）の山頂部一帯に築かれた中世山城である。城史は古く、築城者は、讃岐藤原氏の後裔で、朝廷と鎌倉幕府との間に起った承久の乱（承久 3 年・1221 年）で幕府方北条氏に味方し、その戦功により綾、香川四郡の守護職に任ぜられた香西資村（香西氏初代）と伝えられる。

その後、香西氏は豊臣秀吉の四国攻略（天正 13 年・1585 年）によって四世紀近く続いた栄光の歴史が終焉を告げるまで、南北朝時代には足利氏に従い、応仁の乱では管領細川勝元の世に細川四天王として活躍し、三好氏天下を制する時は三好家に属し、織田信長が 15 代將軍足利義昭を奉じて入京するや信長の旗下に、信長の死後土佐長宗我部元親が四国征服を志す時は長宗我部に和すという如く、巧みな策謀により戦乱の世を切り抜けていく。

その間、本城跡においても戦雲が近づくにつれて度重なる改修工事や改造工事がなされ、「中世山城に通有の階段状の郭の配置（北東尾根上の郭群）や要所に切通し状の遮断部や土塁、石塁を設ける縄張の中に、本丸跡周辺の塁の縄張に特徴的な概観近世的ともいえる巧緻な城構

え（柵形状部、喰違虎口、折れひずみ、入角部など）」『第一次調査報告より』が組み込まれていく。

そういえば、中世山城として本城跡とよく比較される雨瀧城跡や天霧城跡は、地形に制約されてか四方に延びる屋根筋に L 字形に削平された郭を階段状に並べ



第 1 図 本丸土塁を三の丸跡より望む

るだけであり、土塁、石塁についても郭縁辺にその痕跡状のものが見受けられるだけで、本城跡にみられる本格的な土塁、石塁は存在しない。

これらの点で、勝賀城跡は同時期に存在した雨瀧城跡や天霧城跡とは際立った相違をしており、特に本丸跡周辺は周到に郭や塁が配置され、人智を尽した防御施設が天



第2図 勝賀城跡と周辺主要城跡

1 勝賀城跡	2 鬼無城跡	3 佐料城跡	4 作山城跡
5 藤尾城跡	6 芝山城跡	7 植松城跡	8 中山城跡
9 黄峰城跡	10 龜水城跡		

険と相まって攻城を困難なものとしている。

その上に、香西氏は支配下の要衝の地に、一門や臣下の部将の城館を数十ヶ所も配し、敵軍の侵攻に対し万全の防備をしている。第2図は本城跡周辺部に限るものだが、山頂に占地して眼下の平野部や海上よりの侵入に備えるもの、あるいは狭隘の地であって敵の進撃を妨げるものなど本城跡を中心とした香西氏の城館配置の一端が窺える。

まさに本城跡は、築城の基本である堅固三段、すなわち国堅固（国内の政略的要地を占める）、所堅固（城郭周辺の地勢からみて要害の地を選ぶ）、城堅固（城自体、堅固な防備をもつ）を兼ね備えた中世山城の好例である。

Ⅱ 調査の経過

1. はじめに

東讃の雨瀧城跡（安富氏）や西讃の天霧城跡（香川氏）と共に、中讃の雄・香西氏累代の牙城であった勝賀城跡は、本丸土塁を始めとして土塁、石塁及びそれらに囲繞された郭群（以下特別の場合を除き、郭を遺構中の削平区画の意味で用いる）などが殆ど損壊を受けずに遺存して、よく往時の姿をしのおことができ、中世讃岐の代表的山城として名高い。

しかし、本城跡の構造形式（縄張）や構築方法の詳しいことについては、城跡が高所にしかも広範囲に跨って存在するため、十分明らかではなかった。そのため高松市教育委員会は、香川県教育委員会の協力を得て、昭和53、54年の両年度にわたって本格的な調査を実施する運びとなった。

2. 第一次調査

昭和54年初頭に、県教委文化行政課文化財専門員秋山忠（現・県立高松西高等学校教諭）の現地指導のもとに行った第一次調査では、城跡の地形測量と本丸跡の試掘調査を実施した。

業者に委託した地形測量では、調査員が立ち合い、遺構の所在を指示したため、単なる山頂部一帯の地形測量に留まらず、城跡全体を正確に位置付けた遺構図も併せて作成できた。

その結果、従来郭の縄張として山頂平坦部を本丸、北東尾根部の階段状の郭群を二の丸、北方山腹の平坦部を三の丸と呼称していたのを改め、山頂平坦部を内郭として、南に堅固な土塁に囲まれた本丸（第4図1）、北に4郭からなる二の丸（第4図2）、東に2郭



第3図 第一次調査試掘風景

からなる三の丸（第4図3）を配したものとした。また、堀切によって主要部と切断されている北東尾根上の郭群（第4図4、5、6）を防備の前衛的なもの、北方山腹の平坦部（第4図7）は内海への展望に優れていることなどから香西氏の制海権に係る城構えではないかとした。（本書の各名称は第一次調査の名称を踏襲する。）

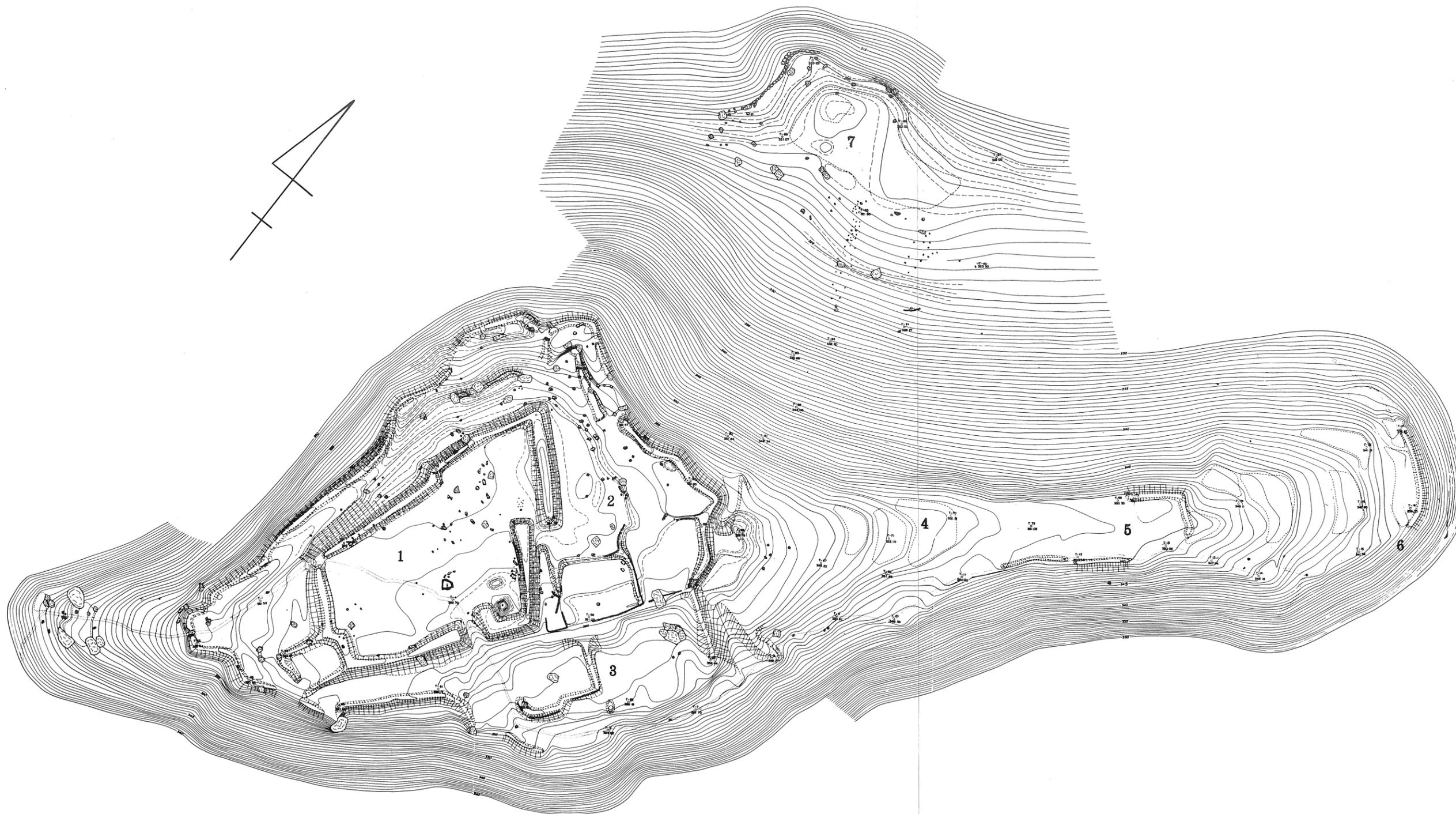
試掘調査は、遺構の有無や城跡の年代的な位置付けに直接係る遺物の検出を目的として本丸跡内で実施した。残念ながら期待された建造物遺構の存在は認められなかったが、発掘区画内やその周辺で平坦な上面を持った礎石様のものの存在が目目された。

出土遺物は、備前焼、土師質土器、青磁、鉄釘、銅製留釘、古銭などであった。その内、時代が比定できる備前焼の特徴や古銭の鑄造年代より勘案して、第一次調査に係る遺物は鎌倉後半～室町前半頃を示すものと考えられ、この限りでは本城跡がかなり年代的に遡る可能性があることが明らかとなった。

なお第一次調査では、勝賀城跡に深く関連する佐料城跡（里城、居館跡）、作山城跡（繫^{つなぎ}の城、伝^{つたえ}の城）、藤尾城跡（香西氏最後の拠点）、芝山城跡（海防強化の出城）の踏査をも行い、概況を把握した。

3. 第二次調査

第二次調査は、第一次調査の成果を踏まえて、二の丸跡東部と北方山腹の平坦部を対象とする、試掘調査を含む細部にわたる調査が計画され、昭和54年10月29日よ



第4図 勝賀城跡測量図

0 10 20 30 40 50 m

り着手した。

調査は、まず位置的にも本丸跡に隣接し、在り方も比較的まとまって、建造物跡の存在が最も期待される二の丸跡東部より開始し、50分の1縮尺の測量と並行して試掘調査を実施した。

11月17日には、第二次調査の中間報告会を現地で開催し、同時に今後の方針を決定するため、参加者各位の献身的な奉仕活動によって、二の丸跡西部と北方山腹の平坦面を伐開した。

その結果、北方山腹の平坦部については、岩石の多い地質で部分的な試掘調査では十分な成果が期待できないこと、かつ地表観察によっても西側縁辺を画する列石群以外顕著な遺構が見当たらないことなどにより、今回は調査を見送ることにした。

そして以後の調査対象を二の丸跡全域に広げ、郭の配置と石組みの状況に主眼を置いて調べることにした。また一部崩壊していた本丸土塁の修復と、井戸跡とされる箇所^の発掘も併せ行った。

実測調査の結果、第一次調査では一部不明瞭であった二の丸跡の郭の配置を正確に位置づけることができ、発掘調査では、石組みや本丸土塁などについて新知見を得ることができた。

以上の経過により、勝賀城跡そのものに関する調査は11月30日に終了したが、今回新たに踏査を行った植松城跡、中山城跡、黄峰城跡^{おみね}等のうち、黄峰城跡は遺構が特異でありかつ遺存状態が良好なため、昭和54年12月17日より同55年1月7日まで9日間にわたって500分の1の遺構及び地形の実測調査を実施した。

Ⅲ 調査について

1. 調査区の設定

発掘調査は、主として二の丸跡東部で実施した。ここは、本城跡で最もまとまった在り方をした箇所^で、遺構の築造方法の究明や、建造物跡、遺物の検出を通じて本城跡の性格の一端を明らかにすることが期待された。

そこで二の丸跡東部を便宜上、空堀部と二郭の三区画に分け、南より第Ⅰ～Ⅲ調査区とした。第Ⅰ調査区は、発掘によって本丸土塁が損壊することを考慮に入れ、

中心線北側部分中心に約
100 m²の調査区画を設定
した。第Ⅱ・Ⅲ調査区は、
それぞれ56 m²と30 m²の
トレンチを調査区中央に
設けた。

また、二の丸跡全域に
わたって、石組み部分の
表土層を除去し、構築状
況を記録したほか、井戸
跡推定地の調査も実施し
た。



第5図 第二次調査発掘作業風景

2. 第Ⅰ調査区（第13図）

この調査区は、本丸と東部二郭を遮断した空堀状になっている箇所、主として本丸土塁の防御能力を高める機能を有する。

ここでは調査区の形状に合わせて、東西に不整形な4グリッドを設定し、西より1～4グリッドとした。

〔Ⅰ-1グリッド〕（第14図）

第Ⅰ調査区の西端、すなわち空堀の内奥部分にあたるこのグリッドでは、北側上端部に散見していた握拳大から人頭大の石群に興味を持たれた。表土層を石群が現れる程度まで剥ぎとったところ、やはり石は上端部を中心に検出され、底部には余り転落していなかった。全体として、石の分布はかなり疎であって、石垣の痕跡とも考えられず、その性格は不明である。

あえてその果した用途を考えると、在り方より、上端部からの崩壊防止を意図したものか。

〔Ⅰ-2グリッド〕（第15図）

このグリッドは、本丸土塁崩壊部の修復も考慮に入れて、中心線南側に設けた。ここでは、本丸土塁部を除けば、特記すべきことはない。

本丸土塁は、崩壊部分に限り縦2 m、横3 mにわたって断面L字形にカットした。深さは1.6～1.8 m程である。

土層は十層に区分されるが、大きく分けると、草木の腐植作用で暗褐色を呈する表土層、その下で土層が東西に



第6図 本丸土塁裾部より検出された石群

分かれ、東に暗灰褐色土層、西に暗褐色土層がある。次いで黒色粘質土層がはいり、基部に色調、土質に多少の変化はあっても各調査区最下層に現れる暗黄土色土層が広がる。

土層より判断すると、崩壊は左右の土質が異なる部分で起っている。この部分を細かく観察すると、東側部分は径3～5 cm大の明黄褐色の小礫を多く包含し、そのためもあってか、特に下層では互層になってつき固められ、いわゆる版築状になっている。西側部分是对象的に、礫をあまり含まず、また明瞭に版築状にもなっていない。これは同質の土をつき固めたことによるものであろう。

他に本丸土塁の構築方法で注目されるのは、最下層中に食い込む状況で検出された人頭大の石群である。この石群は飛び石状ではあるが、一直線上に並ぶ。土留めの役割を果たしたものと考え、この程度の石で如何程の効果があつたものか疑わしい。しかし、地表に現れている長さが1 mばかりの巨石の配置と考え合わせると、やはり土塁裾部を強固にしたものと考えるのが妥当のようである。

さらに両側面の断面で見られる表土層の状況も、注目すべきである。表土層は下部で厚くはなっているが、余り堆積している状態ではない。廃城以来、四世紀近くを経た今日、本丸土塁が殆ど損壊を受けずに旧状を保ち、空堀部を埋没させていないことは、土塁の土が粘性を帯び、かつ良く締まる土質であることを示している。

〔 I - 3 グリッド 〕 (第16図)

このグリッドでは、空堀と郭との間を画する低い土塁の構築方法が主な調査対象となった。事前のボーリング棒による調査では、土塁周辺部を石で取り固めている感触を得ていた。しかし表土層を剥いてみると、石組みは周辺部には無く、ただ土塁先端部を防護するように存在していたのみである。

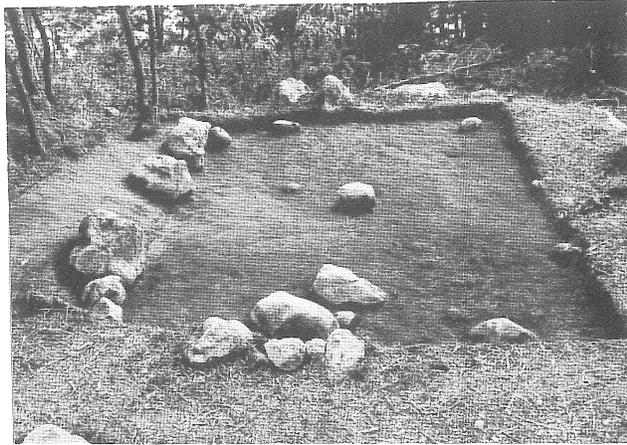
〔 I - 4 グリッド 〕 (第17図)

空堀東端には、東西5 m、南北5 mのコ字形の石組みがある。西方は明瞭に区画されていない。東側の通路と石組み上面の平坦部との比高差は1 m程である。

石組み南部の側面を観察すると、下部に露出している石は自然の露岩であるように見受けられる。そのような目で石群をみると、東に向かって一定の方向で落ち込んでいることがわかる。

る。

石積みの方法として、上部に径0.6～1 m程の大形の石を配し、その間や下部に人頭大の石を据えている。全体としてみると、割と粗雑に石積みがなされているといえる。



第7図 コ字形石組み上面平坦図

この石組み部分は、

本来空堀として本丸防備に重きをなす地点に築かれていること、眼下に平時の居館であった佐料城跡や香西の町を、また遥かに高松平野を隅々まで見渡せることから物見櫓の基礎部であろうか。ただ何故展望にも、防備にも優れる本丸内にかかる施設を設けなかったのか、一抹の疑念が残る。

なお残念ながら、今回の調査では、上面平坦部から建造物跡とおぼしき遺構は検出されなかった。

3. 第Ⅱ調査区 (第18図)

この調査区は、南北20 m、東西15 mの長方形 (矩形) の郭である。調査は、幅2

mのトレンチを南北18m、東西12mの十文字に設定して行った。調査区画は南より1～3、西よりA・Bとした。

[II-1 トレンチ] (第19図)

調査の結果、何ら遺構も遺物も検出できなかった。

[II-2 トレンチ] (第20図)

このトレンチでは、四箇所から土師質土器を検出した。出土層は、第2層上面が多いが、中に明らかに第2層中から出土したのものがある。このことより考えると、各調査区の最下層に現れ、一見地山の観を呈する第2層は、明瞭に区分こそできないものの、整地の際、盛土によって形成された部分もありそうである。

[II-3 トレンチ] (第21図)

遺構、遺物は何も検出されなかった。トレンチ中央部に径40～90cmの石が3個現れたのみである。

[II-A トレンチ] (第22図)

このトレンチと次に述べるBトレンチの断面観察から、第II調査区の下部構造が明らかになった。

断面のほぼ中央部に風化した岩盤が現れたこのトレンチでは、第2層が地山であることは疑う余地がない。トレンチ西部に岩石が集中するのも、上面を削平した結果であろう。

なお、トレンチ断面に、径50cm程の落ち込みが2箇所見られるが、何ら遺物を含まず、性格は不明である。

[II-B トレンチ] (第23図)

Aトレンチから東に向かって徐々に下がる傾向を示す第2層は、このトレンチで急激に落ち込む。そこでこの郭は地形形成のため、まず郭東部に暗褐色粘質土を盛り、平坦面を造成する一方、端部の補強と防備の強化のため、縁辺部を石積みで構築している。

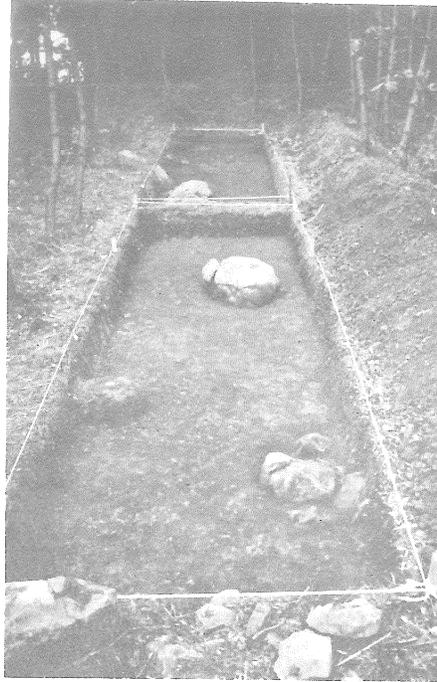
A・B両トレンチで、第II調査区は、西部を削平によって、東部を盛土によって造成していることが判明した。しかし、盛土中から造成時期を特定する遺物の

出土はない。

4. 第Ⅲ調査区（第24、25、26図）

南北20m、東西20mで、不整形な形状をしているこの郭では、南北に幅2mのトレンチを15m設定した。南側をAトレンチ、北側をBトレンチとし、調査を実施したが、土師質の土器片2点を得たに留まった。

この郭は、発掘調査や地表観察により、自然の露岩が多くみられることから、大部分削平により造成されたものと考えられる。



第8図 第Ⅲ調査区試掘状況（南より）

5. 石塁（石垣）について

本城跡は、山頂部一帯に立地し岩石を得やすいせいか、要所に石塁や群石箇所を設けている。その在り方も、明白な意図の下に築かれたもの、自然の露岩を巧みに取り入れたもの、性格不明のものとは千差万別である。そこで今回調査した二の丸跡に限って、特徴的な部分について概略を述べてみたい。

〔第Ⅰ調査区〕

この調査区では、Ⅰ-1グリッド北側上端部の石群とコ字形石組みの2箇所が対象となるが、既述したので省略する。

〔第Ⅱ調査区〕（第27、28、29、30図）

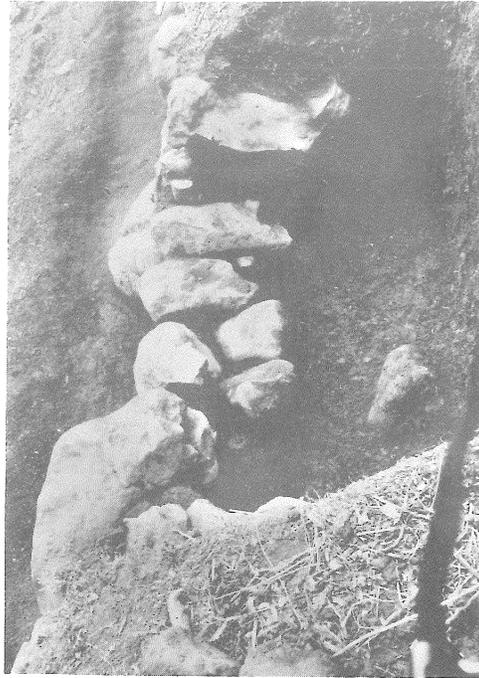
この調査区西上辺、特に北半分は巨石が集まり注目される。しかもそれらは自然露岩でなく、すべて寄せ集められたもので築城者の意図を感じさせるのだが、縁辺上部を画するという以外、雑然として規則性がない。果たして、柵の根止めに利用したものか、Ⅰ-1グリッドの石群と同じく郭上端部の強化を狙ったものか、それとも石塁構築準備中の石群なのか、はたまた単に利用しない岩石を縁辺部に寄せ集めたものか。

東辺および北辺の3・4段に構築された石塁は、郭の端部の補強と防備の強化を意図している。東辺の石塁崩壊部を修復した際、試掘を行い石塁構築状況を把握した。それによると、据わりの良い大きな石は腹部を表面に、細長い石は小口部を表面に出す。本城跡ではどうも石積みに規則性がなく、自由に構築したらしく、石間もまばらに栗石が入る程度で、控え積みは殆どなされていない。

他に注目されるのは、東辺の長さ7mにわたって石塁がみられない箇所(第27図)である。地表観察では、崩壊したようにもみえず、土砂の内部に石塁が遺存しているかどうか興味をそそった。試掘したところ、石塁はその痕跡も検出されなかった。翻って考えてみると、三の丸を二分する土塁が丁度この下から始まっており、火急の際はここを通路として三の丸方面の事態に対処したものであろう。

〔第Ⅲ調査区〕(第31図)

この区画の東辺部には、縦横5.4×3.8m程の自然の巨岩が露呈している。築城者は、この石を巧みに取り入れ、南北に石を築いて石塁とし、二の丸東部の防備を固めている。



第9図 第Ⅱ調査区東辺石塁試掘状況



第10図 二の丸跡西部鉤形に曲る石列

〔二の丸跡西部について〕（第32、33図）

第Ⅱ調査区の北辺土塁に接続して、累々とした巨石が西方へ延びる。この部分は、自然の露岩を利用しながらも、かなり意図的に築かれたものである。

二重目土塁内側の窪地縁辺は、本城跡でも最も良く石塁がみられる箇所である。窪地南側は、巨石が散見される程度であるが、第Ⅲ調査区西辺土塁と二重目土塁部分については腰巻石垣として築かれている。中には第33図C区の如き、鉤形に曲がる石列を設け、土留めとしているものもある。

また、二重目土塁喰違虎口部は、自然の露岩をうまく利用している。



第 11 図 二重目土塁喰違虎口

6. 井戸跡推定地の調査（第12図）

本丸内北東隅に、東西に並んで2ヶ所の窪地がある。その内、西方の窪地は明らかに近年掘られたものである。

東方の窪地は、上端4m四方、深さ2m程で、本丸土塁に取り囲まれ、水の手様になっている。しかし、井戸跡と断定するには今一つ決め手に欠けるため、底部の南西部分を1.5m程掘り下げてみた。その結果、試掘部底部近くで径20～40cm大の石が散在していた以外、木枠や石組みなど井戸跡に係わる施設は検出されなかった。

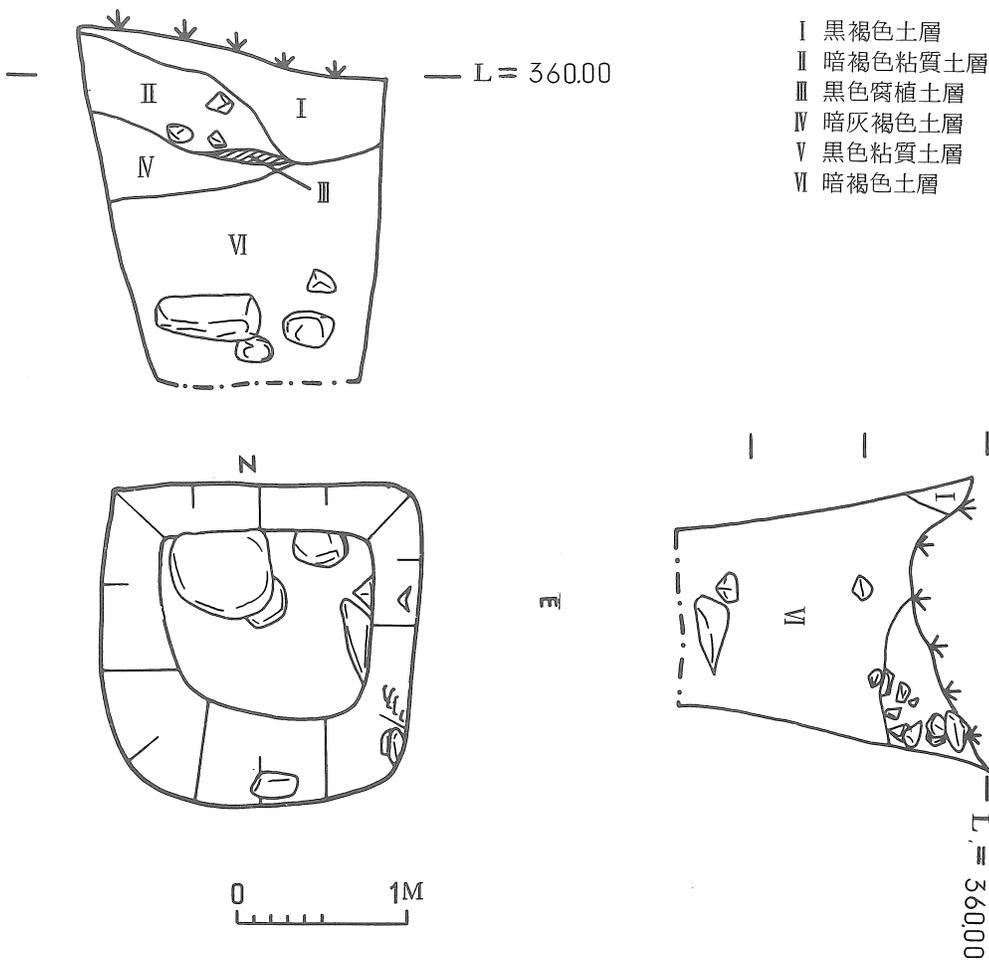
ところで山城では、湧水以外に飲料水を確保する手段として、手桶や甕などを利用して貯水する場合、井戸を掘る場合、雨水を集水する溜井ためいを設ける場合がある。

今、東方の窪地を井戸跡と仮定すると、十分な水を得るためには、すぐ東側にある三の丸の地表面以下まで掘り下げる必要がある。そのためには最低5m以上（恐ら

くは7m以上)の深さが要求され、掘削は相当難しかったであろう。

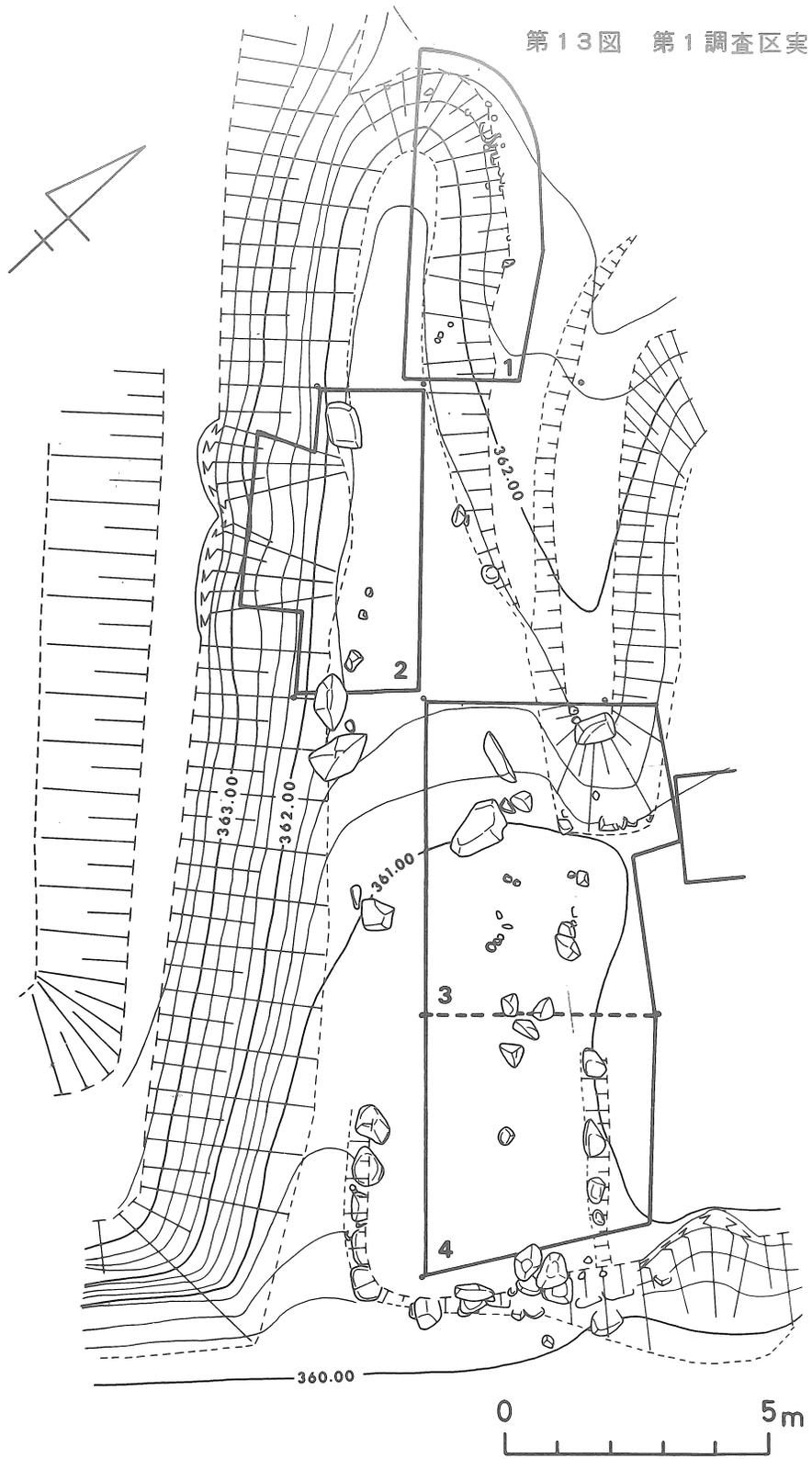
溜井としてみた場合、透水性を持たない粘質土が東の断面上部に現れるものの、受口が最大に考えても4mと規模が小さいこと、側面の土質が貯水に適さないこと、集水路も設けられていないことなどから、その可能性はないと思われる。

ともあれ、側壁崩壊の危険性を考慮して完掘しなかった井戸跡推定地の性格解明は、今回の調査では捜し出せなかった南側斜面の湧水箇所の探求とも合せ、今後の調査課題としたい。

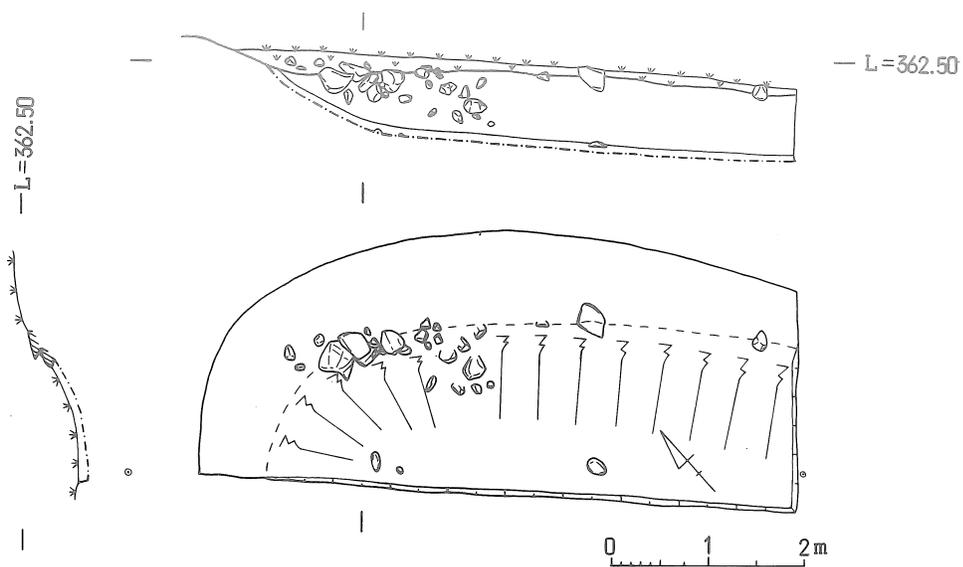


第12図 井戸跡推定地発掘部分実測図

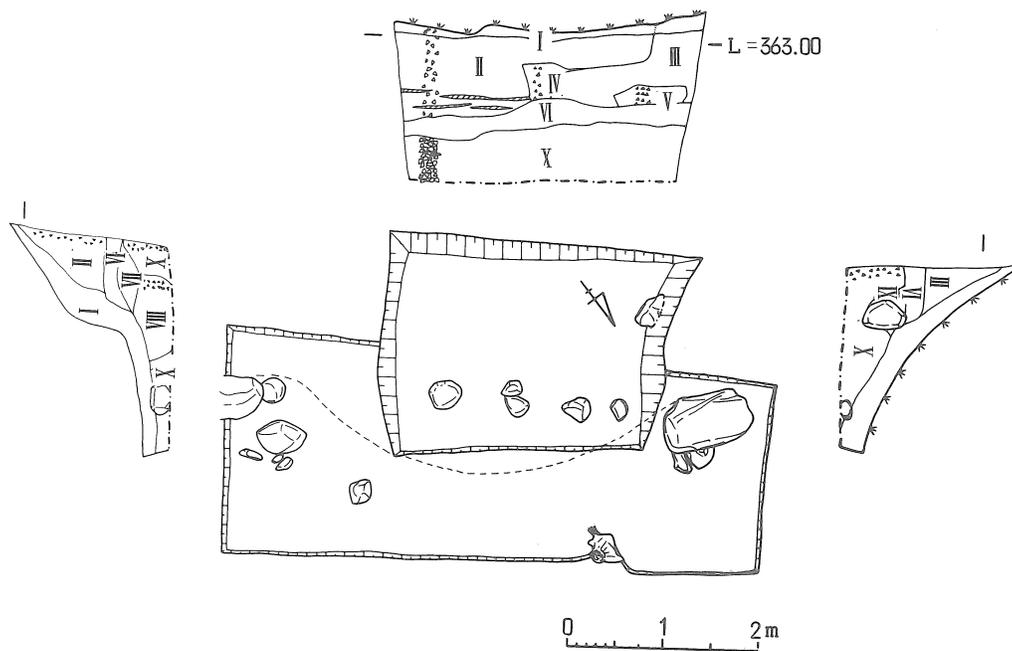
第13図 第1調査区実測図



第14図 I-Iグリッド実測図

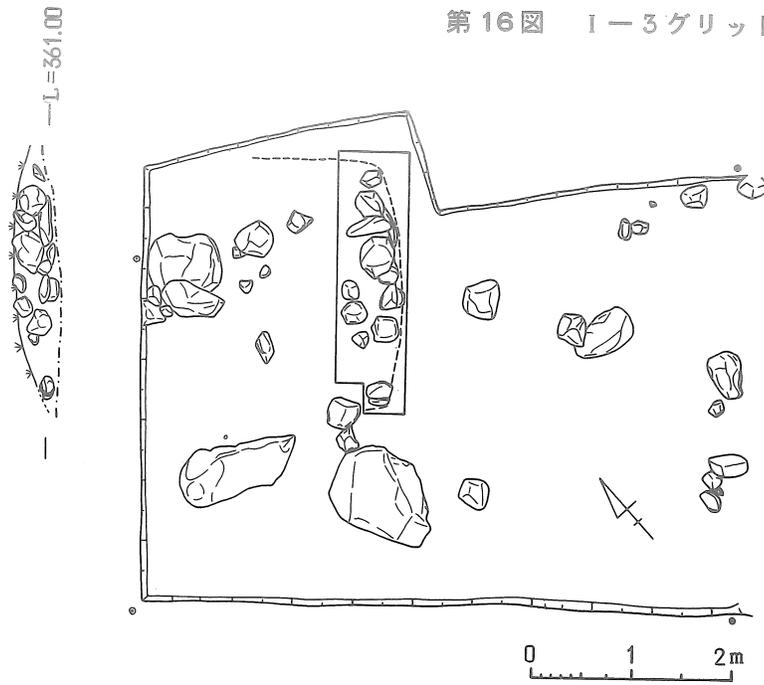


第15図 I-2グリッド実測図

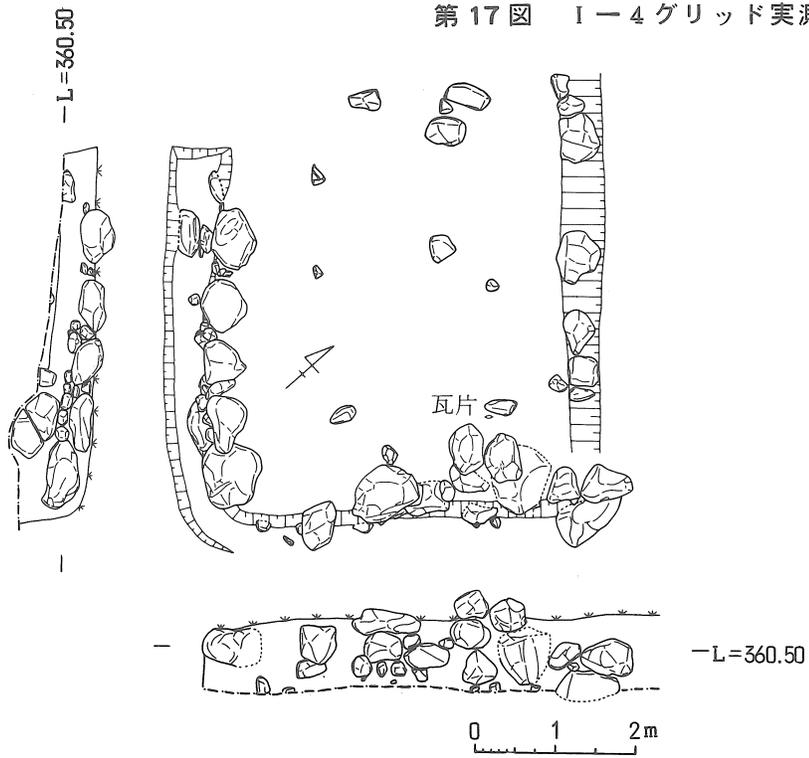


- | | | |
|------------|-------------|------------------|
| I 暗褐色腐植表土層 | II 暗灰褐色土層 | III 暗褐色土層(礫を含まず) |
| IV 暗黒褐色土層 | V 暗茶灰褐色土層 | VI 黒色粘質土層 |
| VII 黒褐色土層 | VIII 暗茶褐色土層 | IX 暗褐色粘質土層 |
| X 暗黄土色土層 | | |

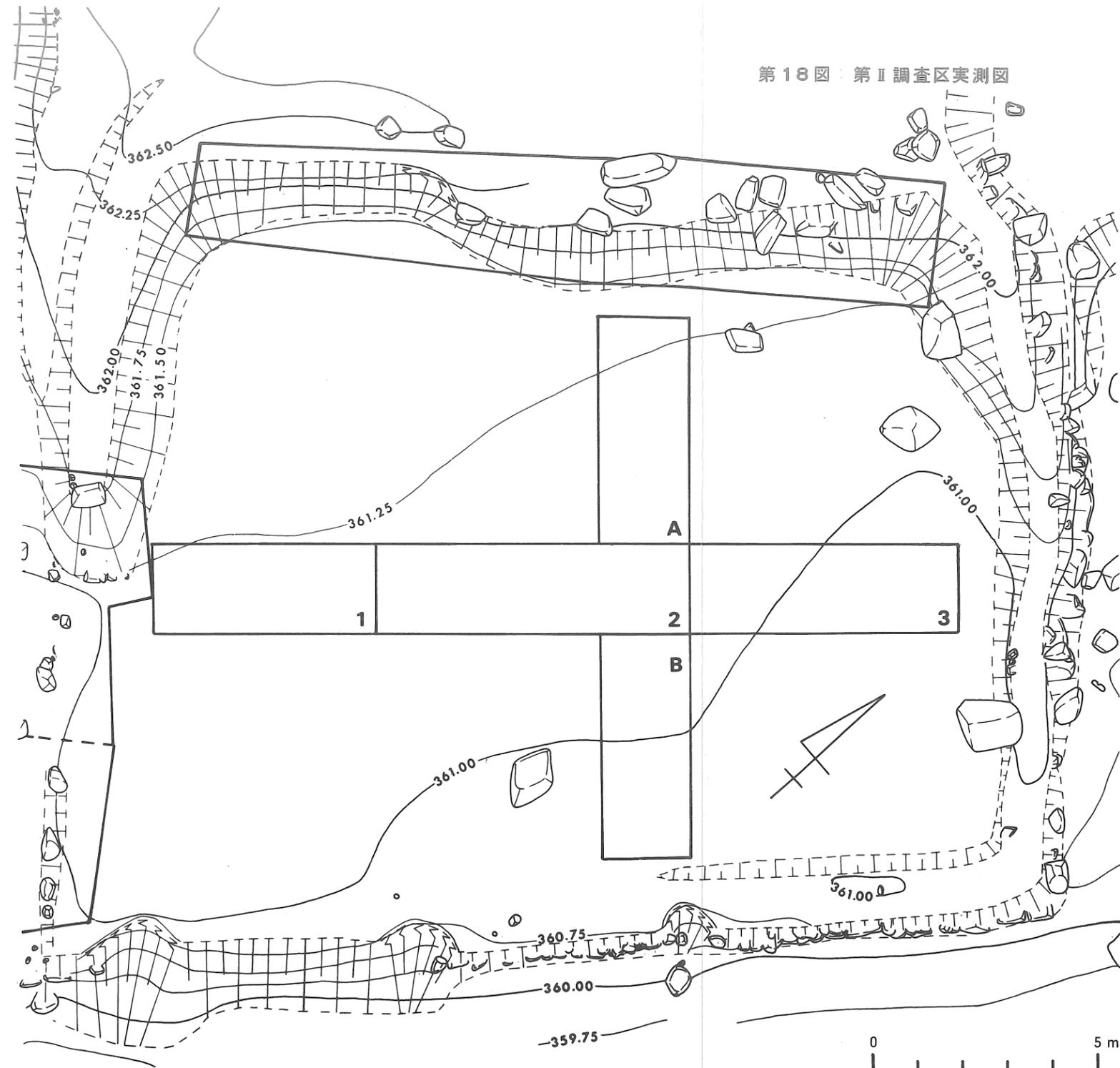
第16図 I-3グリッド実測図



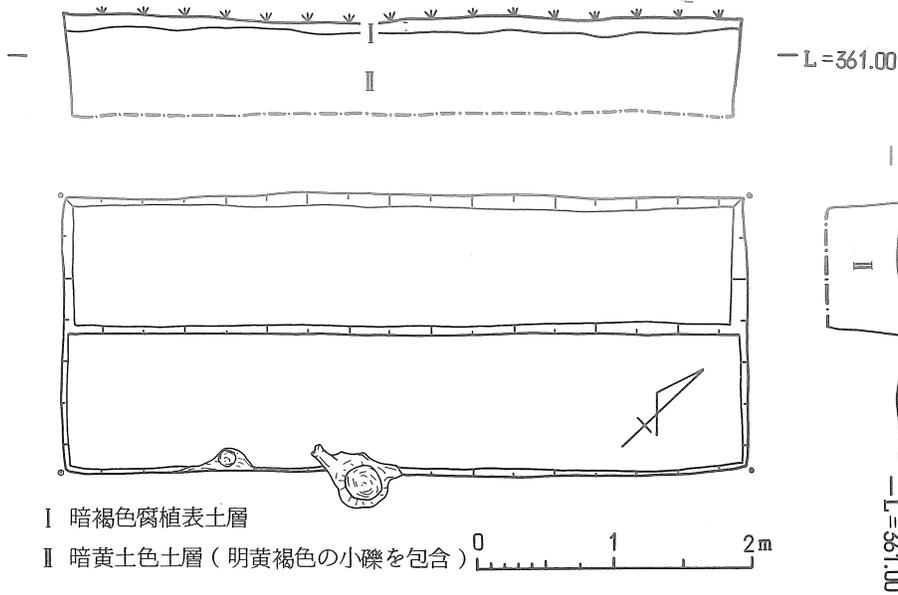
第17図 I-4グリッド実測図



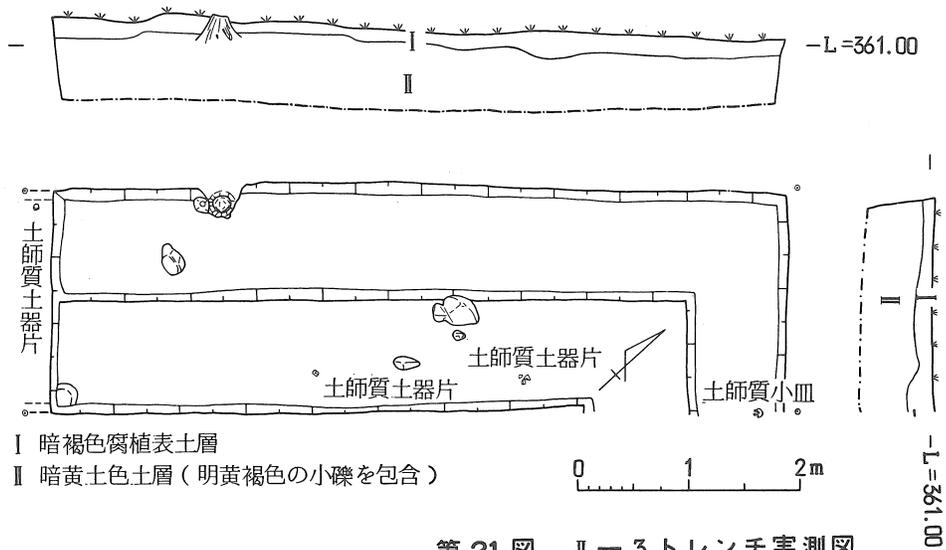
第18図 第Ⅱ調査区実測図



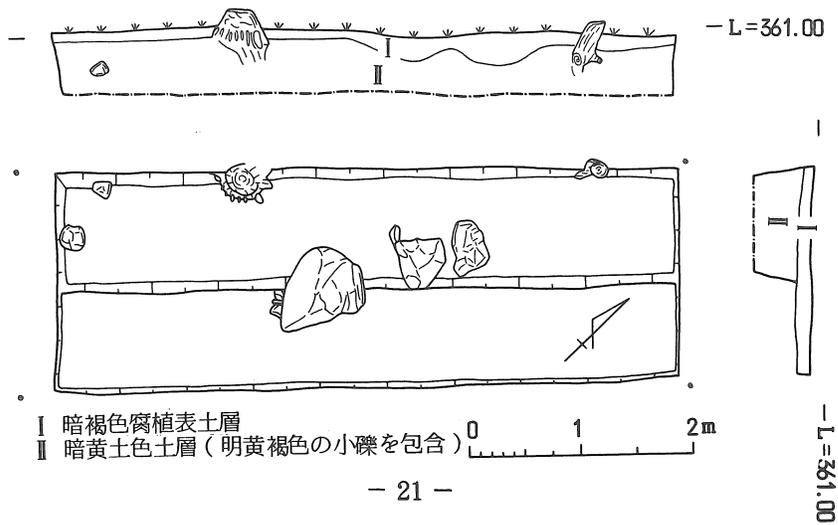
第19図 II-1 トレンチ実測図



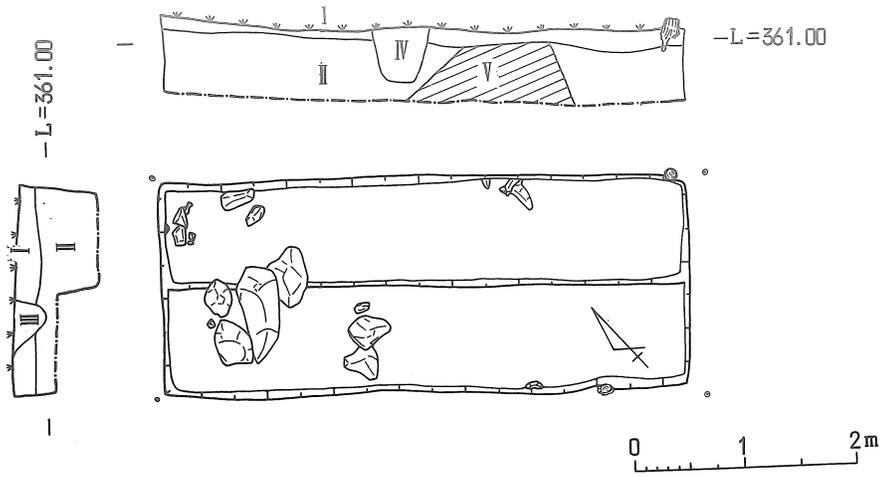
第20図 II-2 トレンチ実測図



第21図 II-3 トレンチ実測図

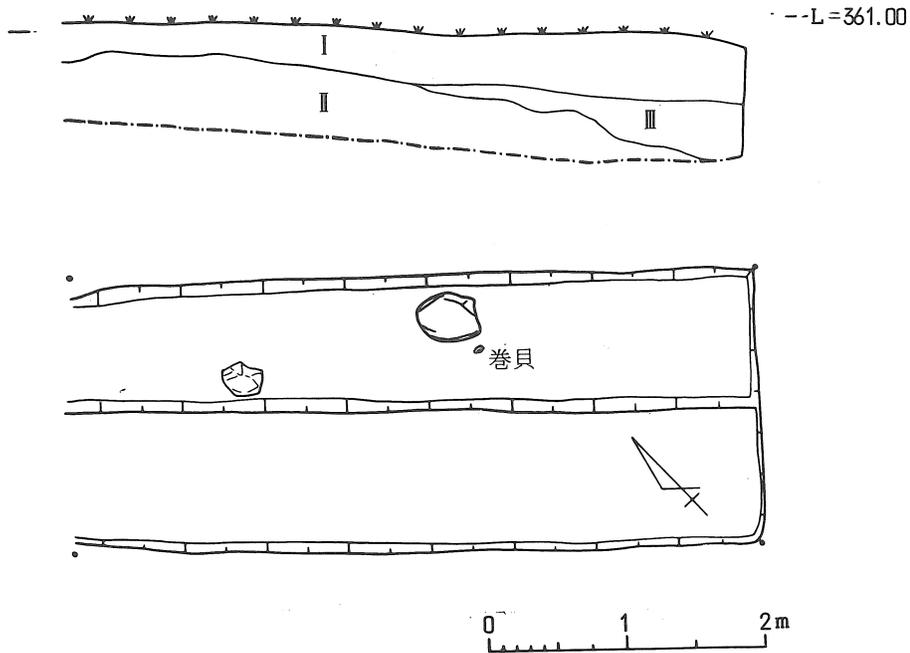


第22図 II-Aトレンチ実測図



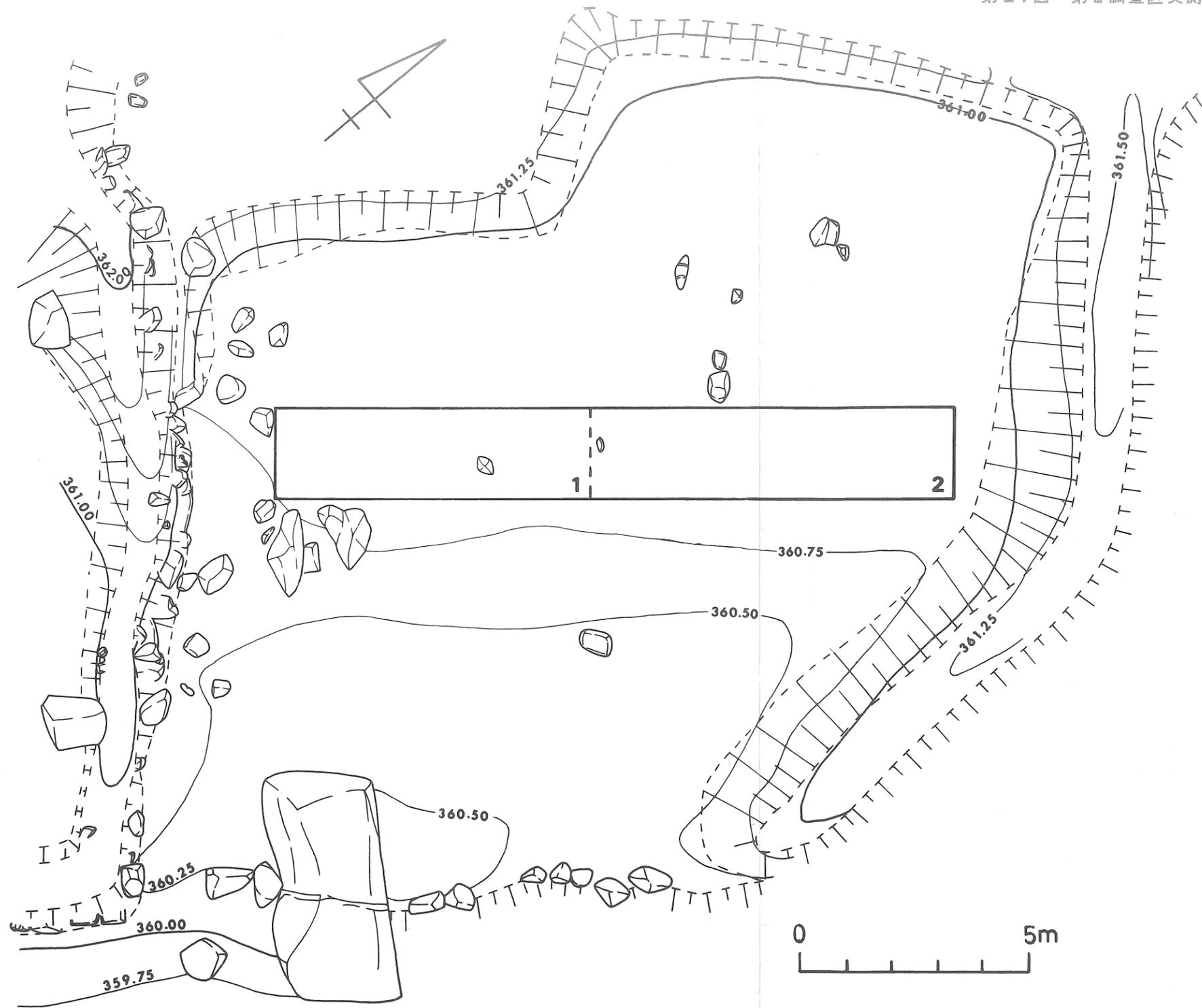
- I 暗褐色腐植表土層
- II 暗黄色土層（明黄褐色の小礫を包含）
- III 暗灰褐色土層
- IV 暗黄褐色土層
- V 岩盤

第23図 II-Bトレンチ実測図

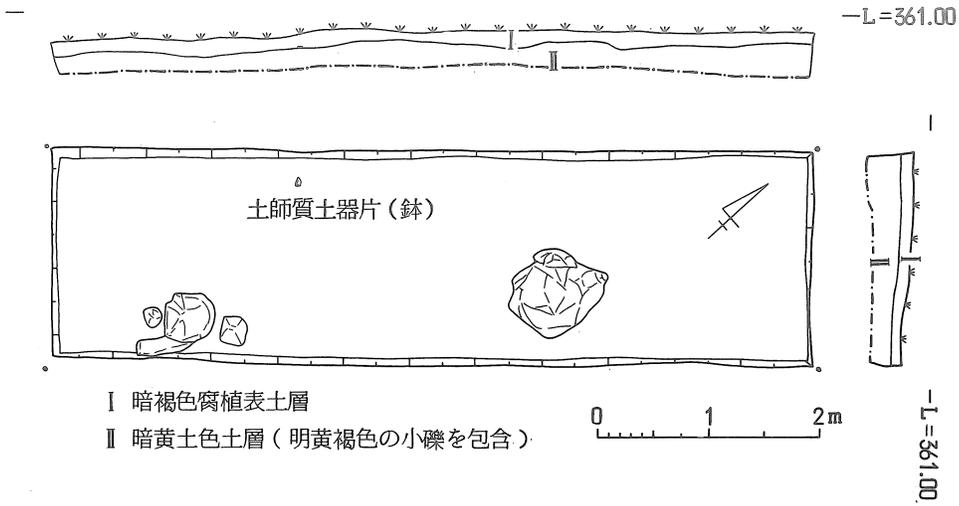


- I 暗褐色腐植表土層
- II 暗黄色土層（明黄褐色の小礫を包含）
- III 暗褐色粘質土層

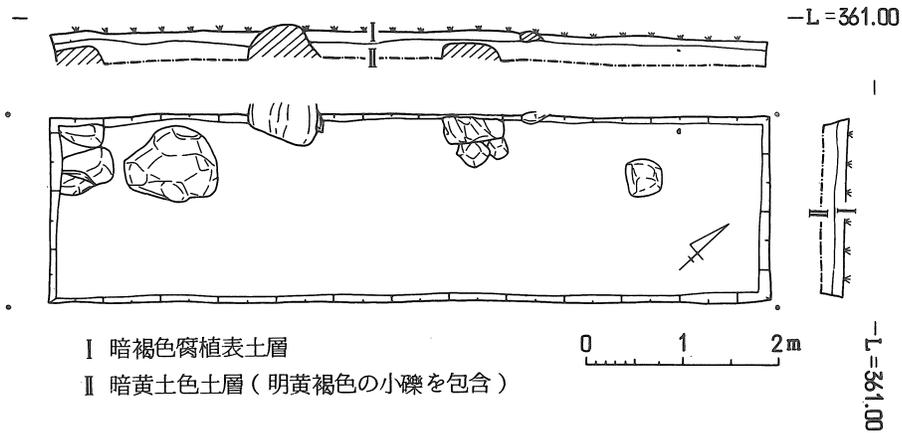
第24图 第Ⅱ調査区実測図



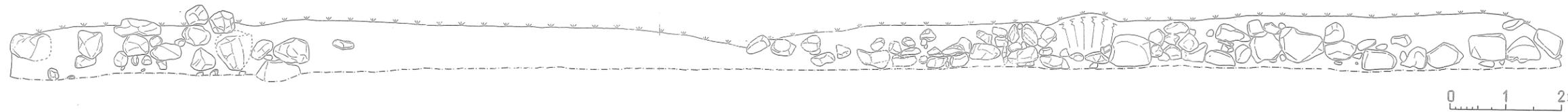
第25図 Ⅲ-1 トレンチ実測図



第26図 Ⅲ-2 トレンチ実測図

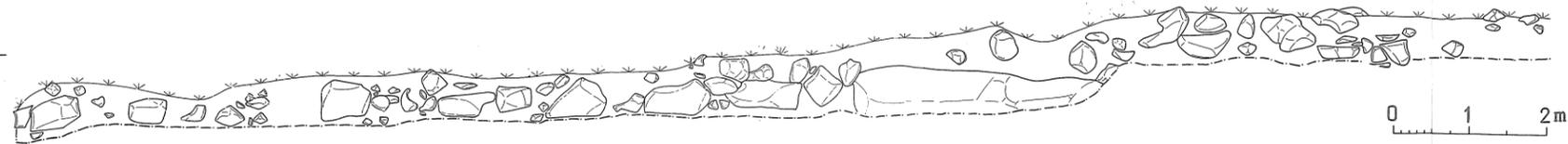


第27図 第Ⅱ調査区東辺石塁実測図



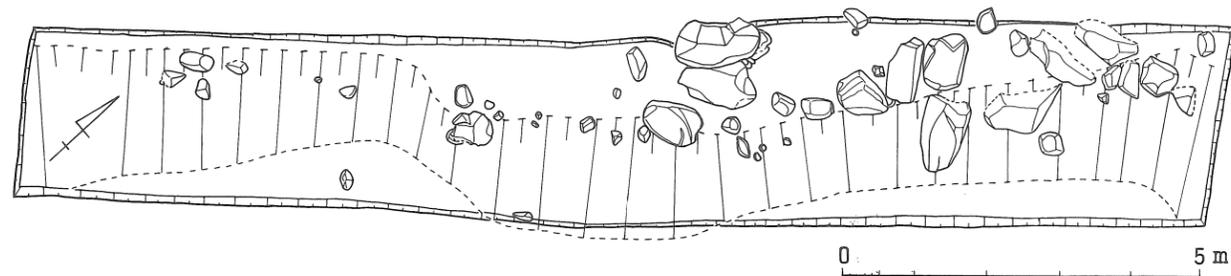
-L=361.00

第28図 第Ⅱ調査区北辺石塁実測図

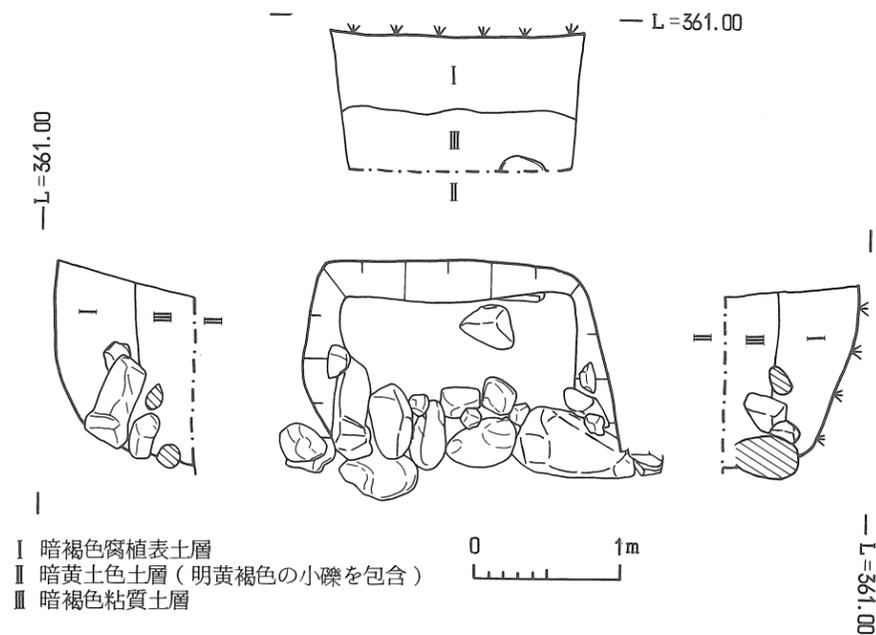


-L=361.50

第29図 第Ⅱ調査区西上辺石群実測図

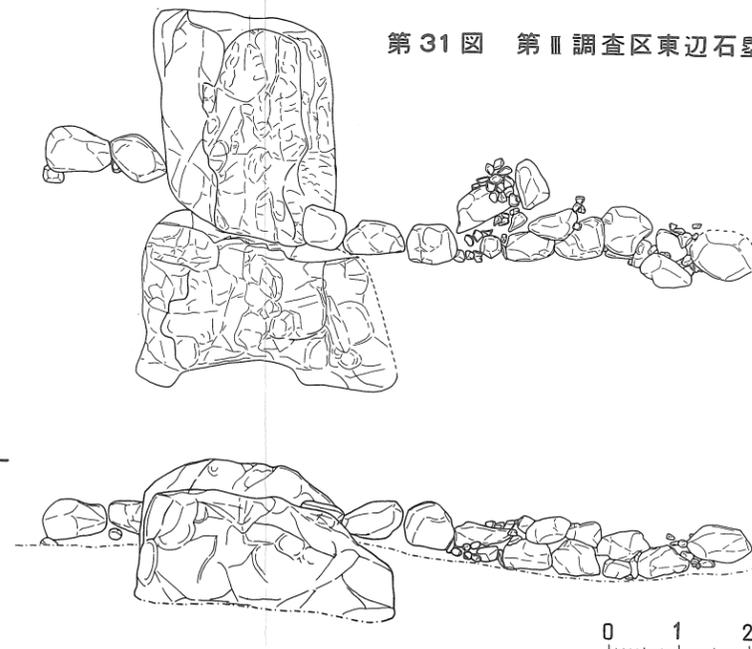


第30図 第Ⅱ調査区東辺石塁試掘部実測図

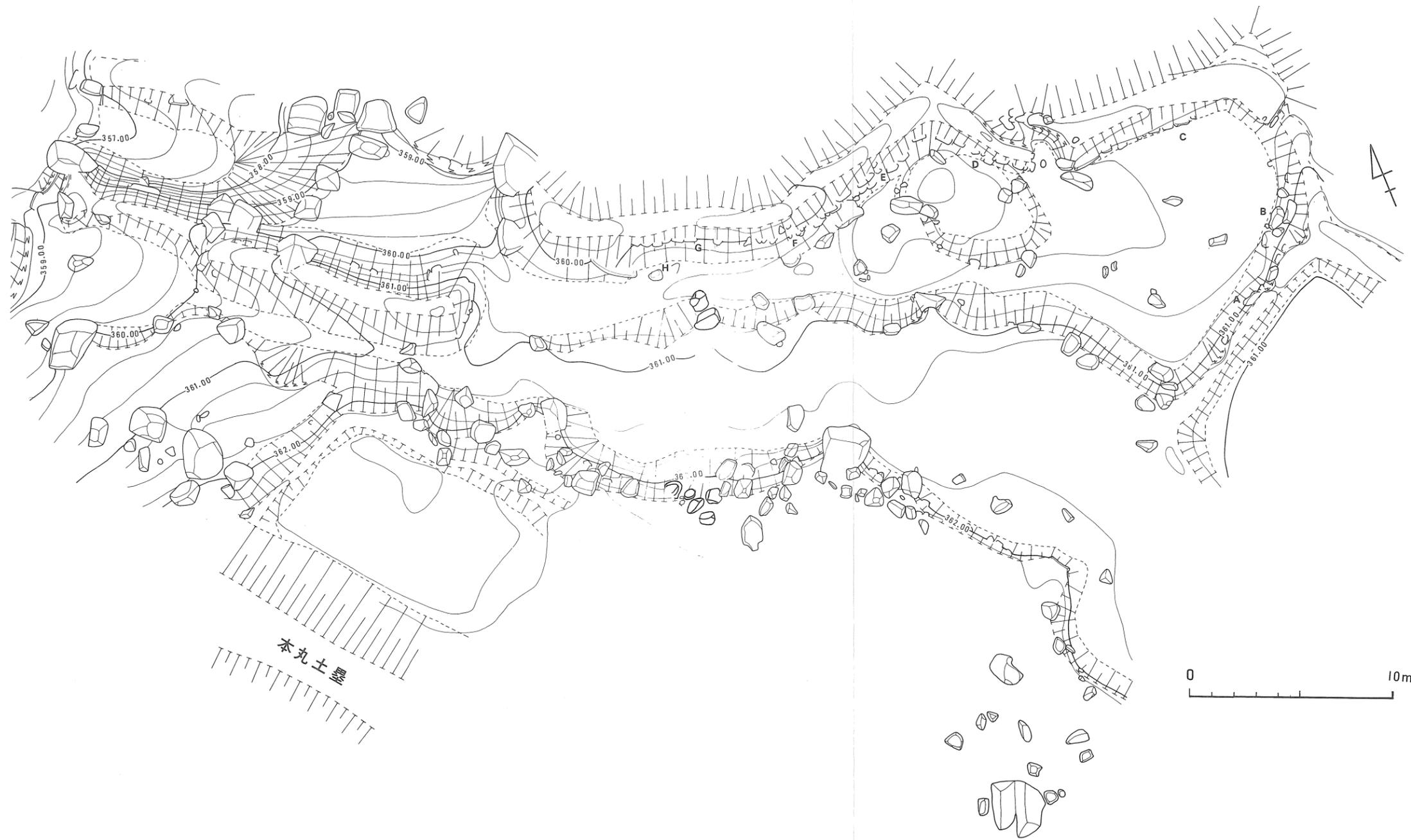


- I 暗褐色腐植表土層
- II 暗黄色土層 (明黄褐色の小礫を包含)
- III 暗褐色粘質土層

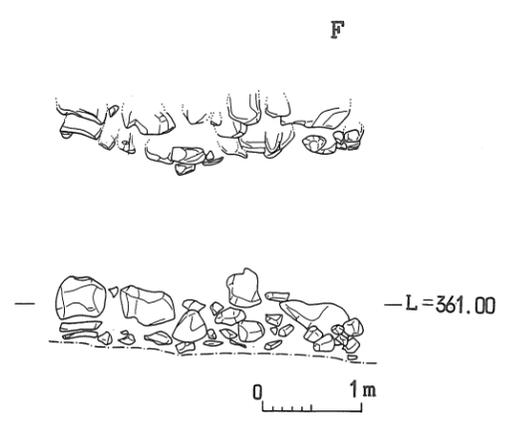
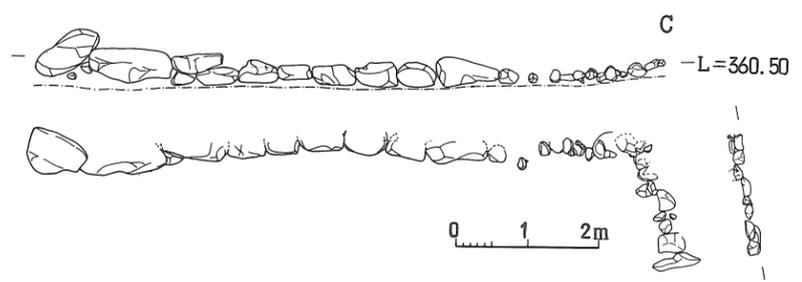
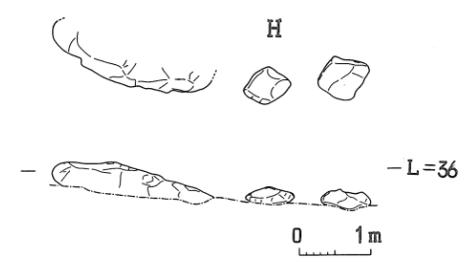
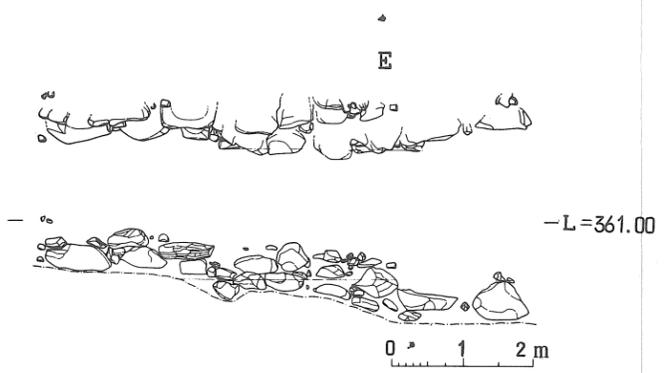
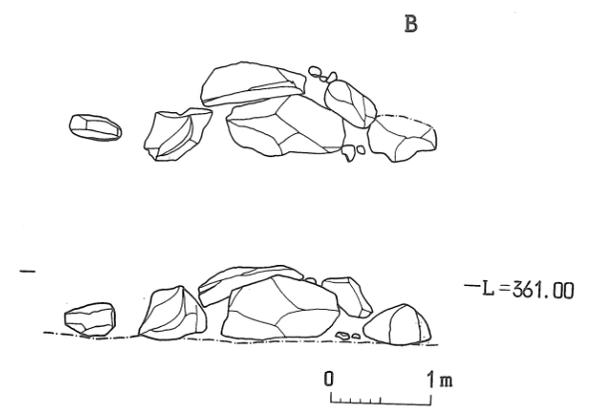
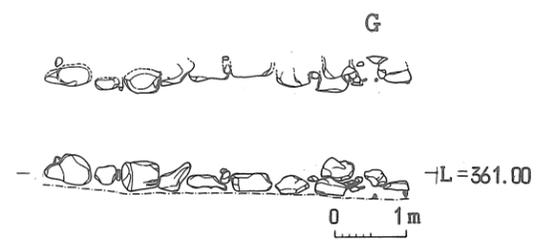
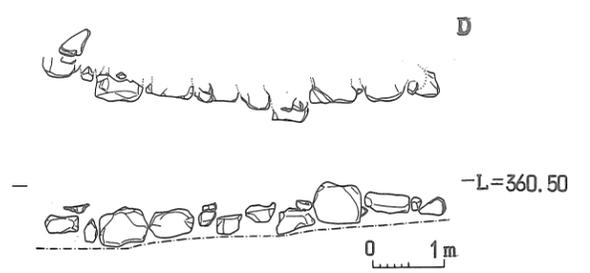
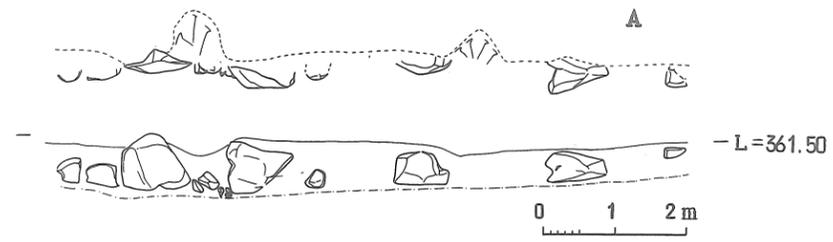
第31図 第Ⅲ調査区東辺石塁実測図



-L=361.00



第32図 二の丸跡西部実測図



第33図 二の丸跡西部石塁実測図

IV 出土遺物について

第二次調査によって得た遺物は、表採も含めて、備前焼、土師質土器、瓦片、巻貝などである。

備前焼〔図版20(1)～(3)〕 甕胴部の破片ばかり3点を採取した。それぞれ色調も暗灰色～黒褐色（外面）と微妙に変化し、内面も肌荒れがひどいもの、胡麻状の凹凸があるもの、平滑なものと区分されるので、別個体のものである。

土師質鉢〔第34図1、図版7(3)、図版20(5)〕 底部は平底で、口縁部は端部近くで内へ折れ曲る。調整は内外面ともナデ調整であるが、内面曲折部はヘラ様のもので押え込む。色調は淡黄褐色で、胎土中に0.5～3mm大の砂粒を含む。焼成は良好である。

土師質土鍋〔第34図2、図版20(6)〕 口縁部は内彎し、端部より1cm程下部が肥厚して鏝部となる。色調は淡黄土色であるが、内面には斑状に暗黄色の箇所がみられる。焼成は良好で、胎土中には2mm大までの砂粒を含むが他の土器に比べ含有量が少なく表面がきめ細かい。調整は内外面ともナデ調整である。

土師質小皿〔第34図3、図版20(7)〕 口径7.2cm、器高1.5cm、底部径5.5cmで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土中には0.5～1mm大の細かい砂粒が混入され、焼成は良好で硬質である。色調は淡黄褐色を呈し、調整は底部を除いてナデ調整が施される。器壁は全般に薄手である。

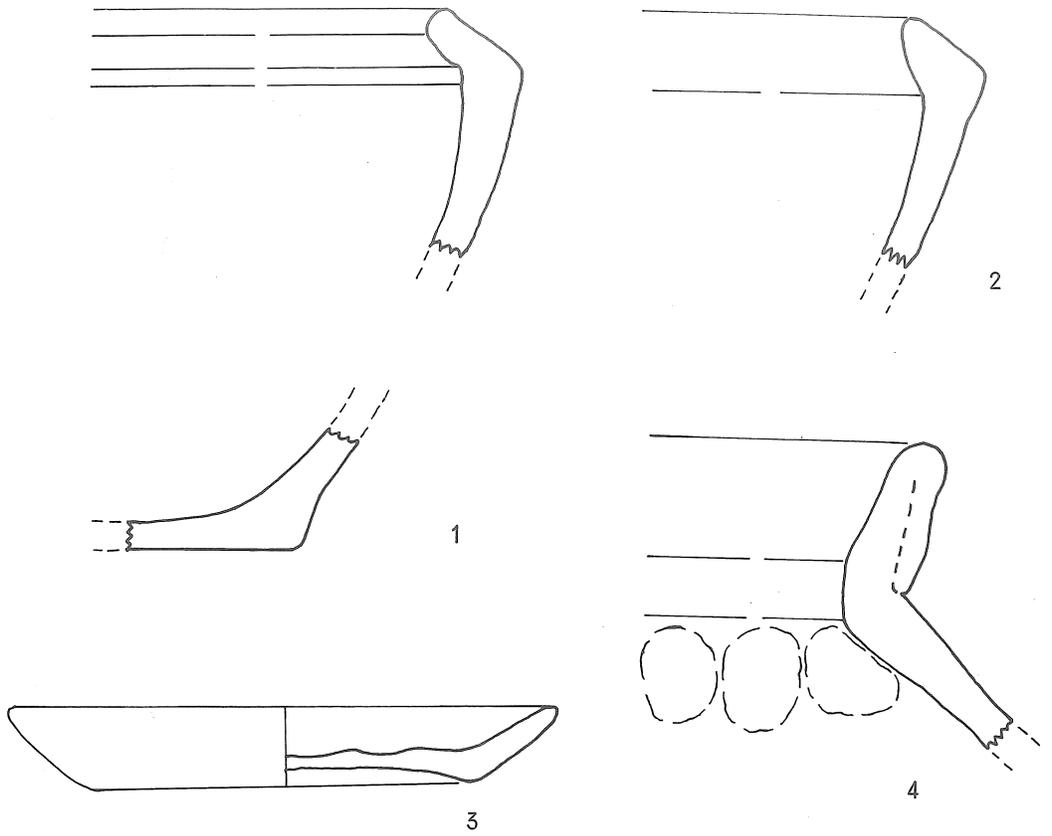
土師質甕〔第34図4、図版20(8)〕 ゆるく外反して立ち上がる頸部は、折り返されて作られたもので、口径は40cm前後を測る。焼成は良好で、色調は淡黄褐色を帯び、胎土中には、微細な黒雲母粒を多く含む。調整は、内面頸部より下に指頭圧痕がみられる外はナデ調整である。

瓦片〔図版20(9)〕 小片なので、瓦片と断定はできないが、同時期の天霧城跡や雨瀧城跡からも瓦が出土しており、その可能性は否定できない。瓦片とすると平瓦の一部で、上面はいぶされて黒色、下面は暗黄土色である。胎土中に1mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。

巻貝〔図版20(4)〕 現在遺存する部分で高さ8.5cmを測る。城築造時に混入したものであろう。

今回の調査では、予期した程遺物が出土せず、また出土した遺物も小片で製作年代を考察する特徴に欠ける。現時点では、出土遺物は中世後半によくみられるものだと

指摘するに留めたい。



第 34 図 土師質土器実測図

1. 鉢（口縁部・底部）
2. 土鍋（口縁部）
3. 小皿
4. 甕（口縁部）

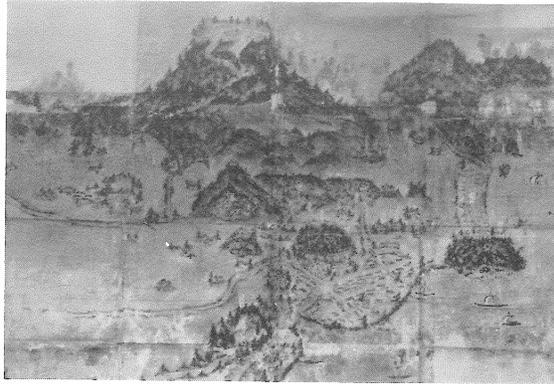


V 周辺主要城跡の概要

第一次調査では、勝賀城跡そのものの調査に留まらず、勝賀山東方に所在する佐料城跡、作山城跡、藤尾城跡、芝山城跡の踏査を併せ行い、その概況を報告した。

このことは、全盛期には周辺の要所十数ヶ所に一門の城館を、また領内各所に大小40に余る配下の部将の出城を置いたという香西氏の城館配置の一端を明らかにしたに過ぎないが、勝賀城跡を戦略的に捉えたという意義は大きい。

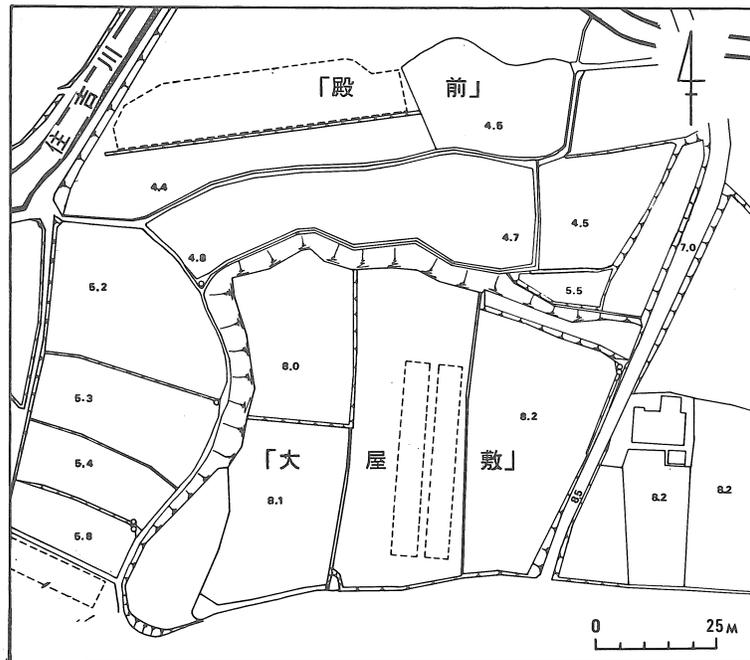
そこで今回も、勝賀山北方の植松城跡、中山城跡、黄峰城跡、亀水城跡と、南の鬼無城跡、南東の室山城跡を選んで踏査を行い、勝賀城跡に関連する主要城跡の基礎的資料を収集した。



第 35 図 天正年間香西氏居城古地図

1. 植松城跡の概況

香西寺が所蔵する「天正年間香西氏居城古地図」で、勝賀山と串の山の山裾が接する要衝の地に描かれている植松城跡は、勝賀城跡の北方1.5kmにあって、香西氏が最後に拠った藤尾城へ赤子谷、桑崎を越えて西方より押し寄せる敵



第 36 図 植松城跡現況図（数字は標高を示す）

に対しては最後の、逆に武運つたなく西方の亀水方面へ逃れた香西氏を追撃するには最初の関門に当る。

築城者は、下香西家（細川氏に仕え京都で活躍した兄元直の系統を上香西家というに対する讃岐香西家の意）の祖、左近将監元綱の孫資正（植松備後守）で、香西宮の下にあった本邸の外に下屋敷として建てたものといわれる。資正は、陣中で失明した香西氏最後の城主佳清を廃そうとした同族備前守清長の謀略により、天正6（1578）年、成就院で奮闘空しく殺害されたその人である。

植松城には資正没後、長子往正（香西加藤兵衛）が入り、天正の末期には豊臣秀吉の四国攻略により退隠した佳清が香西加藤兵衛、植松彦太夫（資正の五男往由）らをたよって乃生村より移り住み、佳清死去後は一時弟久五郎、そして最後に吉田三右衛門が住んだ。

現在城跡は、周辺より一際高く台地状を呈しており、水田として利用されている。上面は東西75～105 m、南北55～75 m程の不整形な平坦面になり、「大屋敷」という地名が残る。この地の北部と西部は切岸状に2.3～3.7 m程低くなり、北面の防備となる住吉川との間の地は「殿前」といわれる。東部と南部は、平坦面と殆ど比高差がなく、往事には土塀や堀などを巡らしたことであろう。城跡の南東部は、道路で仕切られているが、田の区割により旧状を窺うことができる。

ところで、現在「大屋敷」という地を植松城跡と呼んでいるが、讃州府志や香西記には大屋敷は植松彦太夫の城跡で、隣地が植松備後守別業の地とあって、並んで2つの屋敷が存在したように記載されている。

なお台地上は50年程前に、煉瓦土を取るため70～80 cm程削平しており、その際城跡に係わる様な遺物の出土はなかったとの事である。

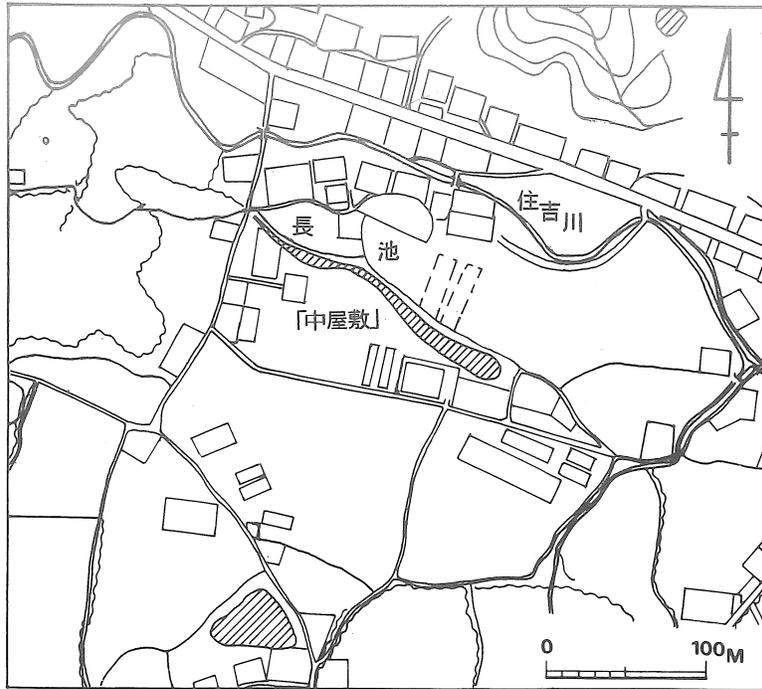
2. 中山城跡の概況

中山城は、本津にあった内間城の属城といわれ、串の山の南方に長池と称する長さ180 m程の堀跡が残る。しかし近年、西側50 m程が埋め立てられ畑地と化し、昭和54年秋からは残りの東側部分も埋め立てられつつある。

堀幅は、5～18 m程あり、西から東へ行くに従い広がる。堀の側面は、粗放な乱石積みで構築されている。土手を隔てた東側の地は一段下って低地となり、現状では堀が連続する地形とはみられない。

中山城は、堀の南側にあったとされ、今も「中屋敷」という地名が残る。しかし、それ以外は宅地や田畑となり、城館の面影を留めない。

ところで城の堀幅は、鎌倉～室町初期には5～8mであったものが、鉄砲の伝来により戦国期には内郭で12m位、外郭で18～20mと広がる。



第 37 図 中山城跡近傍

この点では、佐料

城跡に比べ本城跡の方が近世的な様相を呈する。しかし堀跡すべてを旧状の痕跡とみると、一辺 200 m の広大な城域が考えられ、本城跡の性格からしてなお慎重な検討を加える必要がある。

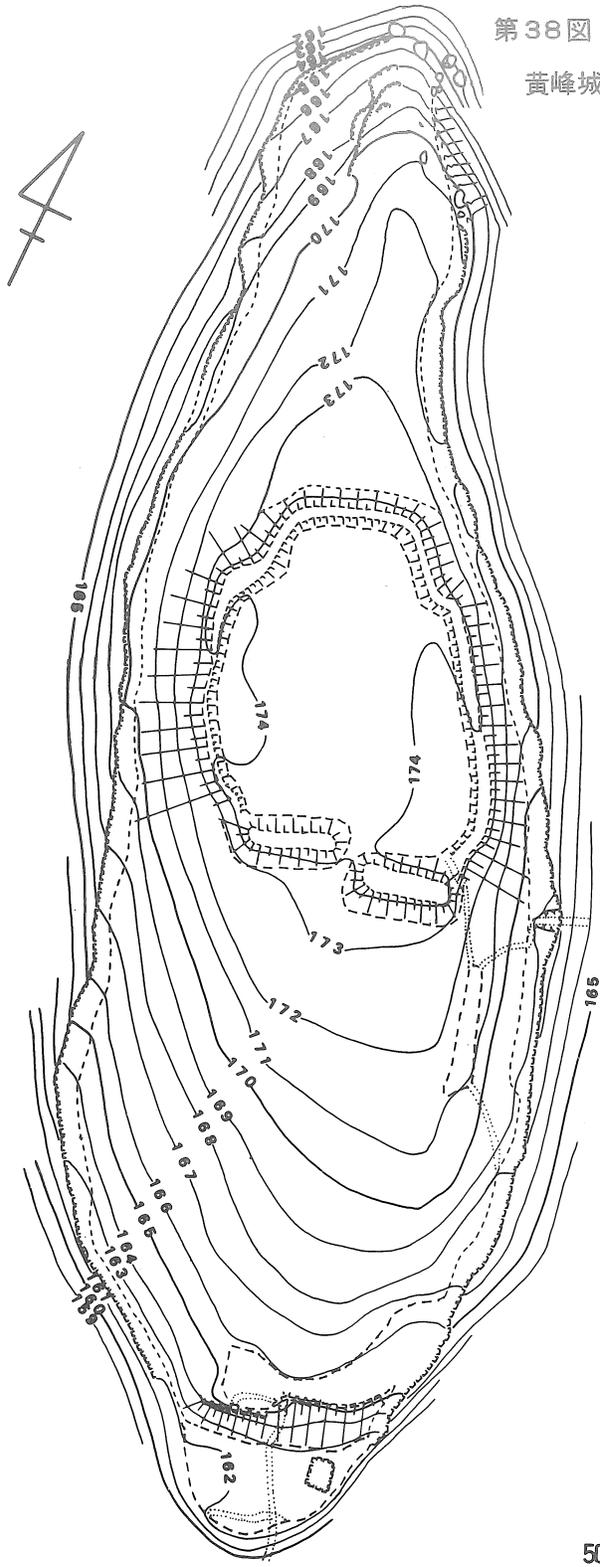
3. ^{おみね}黄峰城跡の概況

高松市生島町にある黄峰城跡は、「伝来曰、黄峰城跡は、昔香西氏要害とし築之て、臣をして交々海岸を守らしむる處也」と香西記に記載されている海辺防備の番手城である。

城跡は、黄峰山頂部（標高 174.9 m）にあり、地形的には四方を山に取り囲まれているが、生島湾や亀水湾を通しての瀬戸内海への展望は左程悪くなく、また勝賀城跡を始め植松城跡、中山城跡をも良く見渡すことができる。

現在山腹には、縦横に山道が走っているが下草の繁茂のため、その多くは通行困難となっている。城跡へは、南北の稜線をたどると良いが、南側からが相当容易であ

第38図
黄峰城跡測量図



る。南東山麓の池のすぐ南に小祠がある。その横の山道を登ると数十m程なだらかな尾根筋が続き、標高100～150mにかけては急峻な斜面となる。その間、所々に凝灰岩が露出するが、150mを過ぎると傾斜は緩くなり、安山岩がみられ、やがて城跡にたどりつく。

南の取っ付き部分には、 13×25 m程の削平地を設け、南面への備えとする。削平地東部には、 3×4 mの低段の方形石囲いがある。性格は不明である。北側は3m程切り立って高くなり、その上部縁辺には石罫が東西に喰違って築かれる。細かく観察すると、石罫と削平地の南端は土がうっすらと盛り上り、土罫の存在を思わせる。

石罫背後の不整形な平坦部を過ぎると、本丸土罫まで東側の細長

い平坦地を除いて格別の遺構はみられない。

南面して設けられている本丸土塁は、本丸を山頂緩斜面から隔絶している。長さは東西共に17m、上辺(褶)^{ひらみ}2～3m、底辺(敷)^{しき}7～8.5m、高さは外側で2m、内側で1mを測り、虎口部は喰違う。



第39図 本丸土塁を南より望む

本丸内は東西35m、南北45m、面積にして約1,500m²の広さがあり、縁辺には低い土塁跡がみられる。本丸跡の四隅は、内に折れ曲がり、いわゆる入隅^{いりすみ}となる。これは地形に制約された面もあろうが、横矢掛りのための一面も見落してはならない。

本丸跡より北端までは、何の造作もみられない。北辺の守りは、累々として石塁を築き、また巨大な自然露岩をも利用して堅固にする。

つまり本城跡では、最も危険な南北両端を削平地と石塁を設けることにより防備する。

さて本城跡は、全長210m、最大幅65mを測り、外囲を囲繞する石塁に他の中世山城にみられない特色を有する。

その石塁であるが、山腹斜面に高さ100～160cm程石積みし、内側は土砂などを石塁上端まで盛る。この幅2～3mの平坦面(馬踏)造成により、本城跡最大の防御施設である石塁上を自由に移動でき、また戦闘に於いて高所という優位な足場を確保できる。

石塁全長は500m程で、東斜面が急なためか東側の方が高所を巡っている。石塁の比高差は、北東の最高所と南端の最低所とでは約10mある。

石積みは、底部前面にしっかりした長方形の石を横に据え、その上に棒状の石を縦に積み重ねる。断面でみると、棒状の石は内に向かって下がる形となる。これは

どぼう
牛蒡積みどぼうに地形を考慮して改良を加えたもので、重心が内側にかかり石垣の崩壊を防げ、また雨水が石の間から抜けるので孕みもない。そのため、石塁の遺存状態は概ね良好であるが東側部分は何ヶ所か崩壊部があり、早急な修復が望まれる。

用材はすべて安山岩で、形状は棒状以外に扁平なものも積み重ねられている。大きさは一般に径10～30 cm、長さ40～80 cmであるが、南東部分は特別大きく長辺1 mを超える長方体の石を用いている。

年代的には、石塁のみに注目すれば讃岐にある古代の朝鮮式山城、城山城跡、屋島城跡に類似する。しかし、削平部を設けたり、本丸跡にみられる入隅、喰違虎口などは、勝賀城跡を正面とする占地とも合わせ、本城跡が中世のものであることを示す。

とすれば、最近の調査事例の増加で中世城跡に土塁を補完する目的での石塁の存在がしばしば報告されても、本城跡の如く石塁が正しく防備の第一線というのは極めて類例が少なく、その点で貴重な遺構といえよう。

4. 亀水城跡の概況

亀水城跡は、紅峰こうのみねにあったと伝えられる。紅峰は黄峰の北にあり、海上への展望に優れる。山腹の各所は断崖絶壁となり、山頂部は北西と南東に大小2ヶ所の広大な平坦面がある。そのうち南東側平坦面で石塁の存在が伝えられる。

踏査では残念ながら石塁を確認できなかったが、地元の人が口をそろえてその存在を述べるので、在る事は間違いない。ただ山麓に門口、頂部に寺屋敷という寺跡に関連する地名が残るので、今後石塁が城跡に係わるものかどうかの確認を急ぎたい。

5. 鬼無城跡の概況

鬼無城跡は、香西氏を攻略せんとした土佐の雄、長宗我部元親の大軍を衣掛一本松の地点でさんざんに打ち崩した鬼無兵庫と香西兵庫の居城である。

城跡は「天正年間香西氏居城古地図」によると、袋山の山麓に城館として描かれている。古地図そのものの信憑性については今後の検討課題となろうが、これを手掛りに現在所在不明の鬼無城跡を搜ってみた。

まず袋山自体、山裾と加藍山との間が狭隘な地となり、西方への押えとして重要な地点に位置する。山頂部（標高261.9 m）からは勝賀城跡を指呼の間に望み、ま

た高松平野南部の動勢を一望のもとにみるができる。

そこで袋山山頂部の踏査を行い、鬼無城跡あるいはそれに関連する城跡遺構の有無を調べてみた。

山頂部の周囲は、急斜面で天険の要害であり、特に北側部分は切り立った崖となる。そこに $4 \times 8 \text{ m}$ と $5 \times 5 \text{ m}$ 程の小平坦地があるとのことだが、踏査時には樹木に阻まれ確認できなかった。山頂には 20 m 四方の削平地があり、その北部には「甕洗祈雨」と刻された小祠が安置される。頂部平坦面から南へ 20 m 下がった所には、岩盤が露出しており、性格不明の石組みが残る。

踏査の結果、城跡未確認の北部及び南部を除いても、少くとも山頂平坦部は城跡に係わるものと考えてよさそうである。この城跡と鬼無城跡の関係について、勝賀城跡と佐料城跡のように表裏一体の関係になるものかどうか、今後の研究に待ちたい。

6. 室山城跡の概況

室山城跡は、特別名勝栗林公園が借景とする紫雲山の南端にある。ここは室山（標高 200 m ）と呼ばれ、城跡はこの山頂部に築かれ、高松平野を睥睨する。

城主は、永正5（1508）年、香西豊前守元定が三谷景久の抛る三谷城を攻めた際参加した太田犬養、元龜・天正頃は同じく香西氏の部将であった真鍋権頭と伝えられる。

城跡は、南北 185 m 、東西 55 m 前後で、南面して築かれる。北端から東側にかけて、現在2ヶ所途切れているが、帯郭とも考えられる幅 $2.5 \sim 8 \text{ m}$ 、長さ 140 m 程の一連の郭がある。北辺の帯郭(?)を経て $12 \times 23 \text{ m}$ 程の郭上に立つと本丸跡は目前である。現状では、上部施設がないので直に本丸に上がれるが、縄張からみて本来は東側へ迂回して上がったものである。

東斜面や南斜面には、大小様々な郭がかつ並びかつ寄り掛って存在している。城跡南端は、急峻な斜面に小削平地を設けたもので、背後は露岩が現れる。

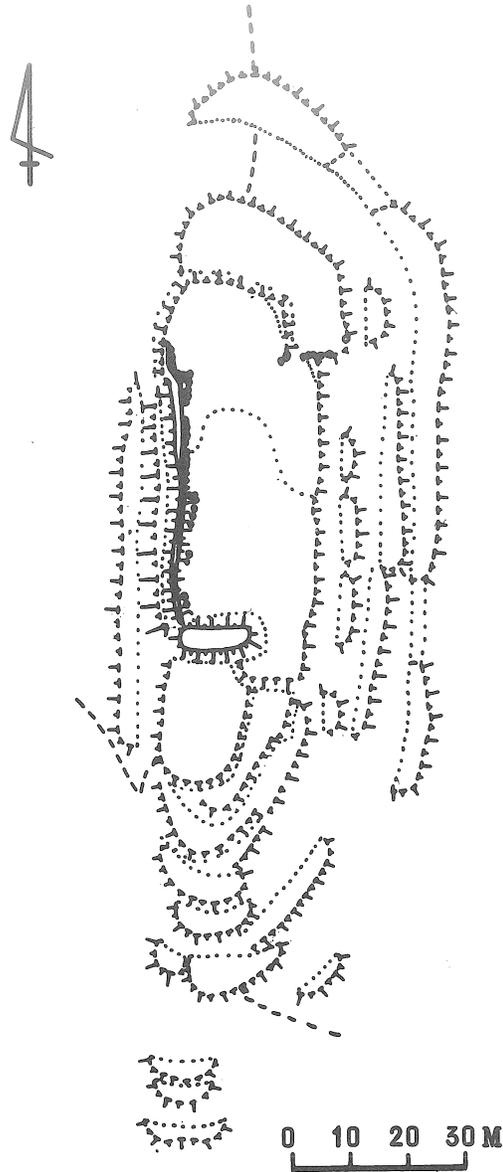
本丸内は、 $23 \times 55 \text{ m}$ 程の矩形で、西部縁辺には長さ 50 m 程の土塁がみられ、北部には折れひずみが設けられる。土塁の上辺（褶）は 1 m 、底辺（敷）は $2.5 \sim 3 \text{ m}$ 、高さは $0.5 \sim 1 \text{ m}$ で南に行くに従い高くなる。土塁内部は腰巻石垣で補強し、外部は帯郭まで崩壊を考慮に入れてか2段に構築する。

さて本城跡で最も特徴的なものは、本丸土塁である。この土塁は西縁辺の土塁に

接続して東に12m程突き出す。
 東側には土塁が無いため通常に
 みられる虎口部は形成しない。
 規模は、上辺3m、底辺8～9
 m、高さは内側で2m、外側で
 2.5～3mを測る。

ここで気が付くのは、全体の
 規模や形状、郭や土塁などの在
 り方が黄峰城跡とよく類似する
 点である。あるいは相前後して
 築城されたものか。

ところで本城跡の立地してい
 る地形は、北部を除いて三方が
 急斜面である。ところが、防御
 施設は主として急斜面に対して
 おり、北部の緩斜面に対しては
 備えが薄い。どのような上部構
 築物があったか、今は知る由も
 ないが奇異の感に打たれる。



第40図 室山城跡概略図

Ⅵ おわりに

従来、立地や規模の点でとかく
 調査に困難が付きまとった中世山
 城も、近年大規模な調査体制が組織でき、調査事例が増大するに従って、その全容が
 明らかになりつつある。

県下でも、国庫補助を得て昭和51年度に天霧城跡、昭和53年度に勝賀城跡の調査が
 実施されており、今年度も勝賀城跡の第二次調査と昼寝城跡（城主寒川氏）の調査が
 行われた。この種の本格的な調査は今後とも増加するものと考えられ、その意味では

県下の山城の調査研究は新しい段階に入ったといえる。

ところで本年度の勝賀城跡の調査では、城跡の上部構築物については何ら遺構を検出できず、遺物についても時代を特定できる資料は得られなかった。このことは、当初の期待を甚だしく裏切ることになったが、予期せぬ成果を上げた点も多々あった。敲き土塁であった本丸土塁下部に検出された石群や、二重目土塁内面にみられる腰巻石垣の存在、あるいは第Ⅱ調査区の地形形成が明らかとなったことなどは特にそうである。第Ⅱ調査区東辺で、石塁や石塁断絶部の内部構造が確認されたのも、大きな収穫であった。また地形測量と併せ、石塁の構築状況を二の丸跡全域で記録できたことも、今後の調査研究の一助となろう。

関連主要城跡については、一部未確認の部分が残ったが、6城跡について、城史や城跡の概況を報告できた。

しかし、二次にわたる調査でも、勝賀城跡のもつ性格の一部を解明したに過ぎない。今後、関連城跡を含めた本城跡の全容が明らかとなるのを期待して筆を置きたい。

参 考 文 献

- 「天正年間香西氏居城古地図」 香西寺蔵
- 「南海治乱記」・「南海通記」 香西成資
- 「香西記」 新居直矩
- 「香川県通史」 福家惣衛
- 「新修香川県史」 和田正夫・松浦正一ほか、香川県教育委員会
- 「香西史」 岡田唯吉ほか、香西町役場
- 「香西氏の城郭」 高松市香西観光協会
- 「香川県の城」『日本城郭全集』 白川悟ほか
- 「中世の城・館跡」『新版考古学講座 6』 小室栄一
- 「方形館雑考」『探訪日本の城 別巻築城の歴史』 小室栄一
- 「城 築城の技法と歴史」 伊藤ていじ
- 「城 その美と構成」 藤岡通夫
- 「日本の城」 藤岡通夫

「讃岐天霧城を探る」 一市二町天霧城跡保存会
「富山城跡第二次調査報告」 岡山市教育委員会
「日本名城大図鑑」 平井聖ほか
「日本城郭史」 大類伸・鳥羽正雄
「星が城」 小豆島山城遺跡調査班
「讃岐の歴史」 香川地方史研究会編
「四国の古城」 四国毎日出版社
「日本城郭大系15」(香川) 松本豊胤ほか
「全讃史」 中山城山
「古今讃岐名勝図絵」 梶原景紹
「勝賀城跡(1979.3)」 高松市教育委員会

Ⅶ 香西氏年譜（未定稿）

本年譜は、讃岐香西氏関係の研究が殆んどない現状に鑑み、史料上にあらわれる香西氏の事歴をそのまま整理してみることもまた必要であろうと考えて、作成したものである。作成に際しできるだけ古文書・日記などの原典によることを基本とし、原典未調査史料については『後鑑』・『史料総覧』によった。しかし時間的制約から十分な史料調査ができず、見落しているものもあるかと思われる。また『南海通記』・『香西記』からも香西氏に関する記事を採った。この両書の内容については、十分な史料的吟味が必要であることはいうまでもないが、本年譜ではこれらの検討は今後の研究に委ねることにし、若干の混乱はあるが、両書の記述のまま項目として記載した。したがって史料的に確認できる事柄を単に項目化しただけにすぎず、考証は全く行っていないため不十分な点が多く、あくまでも本年譜は未定稿であることを断っておきたい。

なお、本年譜作成にあたり、小川信「守護大名細川氏における内衆の成立」（国史学77号）・棚橋光男「嘉吉乱に関する一史料－讃岐国仁尾浦神人等言上状－」（日本史研究192号）・今谷明「室町・戦国期の丹波守護と土豪」（亀岡市文化財調査報告書第7集－丹波笑路城発掘調査報告－）・同「摂津における細川氏の守護領国」（兵庫史学68号）・桃裕行「松江藩香西（孫八郎）家文書について」（立正史学40号）を参考にした。

（木原）

保安1年（1120）

讃岐守藤原家成、綾大領貞宣の女を娶る。讃岐藤原家の祖、章隆生まる。（綾氏系図）

章隆の孫新居資光の子信資、香西次郎左衛門尉を名乗る。（香西記、綾氏系図は信資を資光の弟で、香西三郎としている。）

承久3年（1221）

香西左近将監資村（信資の子）、承久の乱に際し鎌倉幕府方につく。（南海通記）

香西資村、天神のはな南の原に住吉大明神、勝賀山東麓の岡の原に伊勢大神宮を祀り、また藤尾八幡宮を勧請す。（香西記）

寛元4年（1246）3月

このころ香西左衛門尉忠資、備讃海上の海賊を捕え幕府より賞せらる。（吾妻鏡・

香西記。ただし吾妻鏡では藤左衛門尉とだけある。なお南海通記は香西忠資を資村の孫資茂としている。）

建武2年(1335)12月10日

香西氏、足利尊氏方の細川定禅に従い詫間氏とともに鷺田庄(坂田庄)で挙兵す。
(太平記。香西記では香西左衛門尉親茂が尊氏方に属したとしている。)

建武4年(1337)6月20日

香西彦三郎、讃岐守護細川頼氏より桑原左衛門五郎とともに阿波南朝軍の拠る財田城攻撃を命ぜらる。(桑原文書)

康永1年(1342)5月

香西新三郎・子弾正忠資時、阿波守護細川頼春に従い伊予南朝方と川之江千丈原で戦う。(香西記)

観応2年(1351)12月15日

香西彦九郎、細川頼有の注申にもとづき將軍足利義詮より四国での合戦の忠節を賞せらる。(細川文書)

観応3年(1352)2月

香西左衛門次郎家資、細川頼春に従い京都で南朝軍と戦い鳥羽縄手で戦死す。(南海通記)

観応3年(1352)9月27日

香西家資の後を継いだ子五郎殺害さる。五郎の伯父香西七郎資邦、香西家を継ぐ。五郎の弟詫間氏へ預けられ、のち大見六郎綾景利と称す。香西資邦、細川頼之に従い武功を立つ。のち戦死す。(南海通記・香西記)

応永21年(1414)7月

丹波守護代香西豊前入道常建、室町幕府より東寺領丹波国大山庄における即位段銭の地下への催促の中止を命ぜらる。(東寺百合文書)

応永21年(1414)12月8日

讃岐守護細川満元ら、讃岐国白峰の頓證寺の法楽和歌会を催す。香西常建・香西元資、これに参加す。(大日本史料)

応永23年(1416)8月23日

香西常建、東寺領丹波国大山庄の仙洞段銭の催促を止めることを達す。(東寺百合文書)

応永 29 年 (1422) 6 月 8 日

丹波守護代香西常建死す。年 61 才。(康富記)

応永 32 年 (1425) 12 月晦日

丹波守護代香西豊前守元資、東寺領丹波国大山庄の人夫免除を幕府から命ぜらる。
(東寺百合文書)

応永 33 年 (1426) 7 月 20 日

香西元資、細川満元より丹波国何鹿郡内漢部郷・八田郷内上村の上杉憲実への沙汰
付を命ぜらる。(上杉家文書)

永享 3 年 (1431) 7 月 24 日

香西元資、將軍足利義教より失政により丹波守護代を罷免さる。(満濟准后日記)

嘉吉 1 年 (1441) 頃

守護細川氏直領讃岐国仁尾浦代官香西豊前入道元資、理由なく地下人を折檻すとし
て仁尾浦神人に訴えらる。この頃香西五郎左衛門、仁尾浦へ船についての指示を待つ
よう伝える。(仁尾町加茂神社文書)

嘉吉 3 年 (1443) 5 月 21 日

摂津国住吉郡守護代香西五郎右衛門之長、同郡堺北庄の在所警固得分惣錢五分一を
得る。(建内記)

享徳年中 (1452～54)

香西備後守元資、成就院神宮寺を再興す。(香西記)

寛正 6 年 (1465) 頃

香西主計允、摂津守護細川勝元の奉行人となる。(今谷明論文)

応仁 1 年 (1467) 5 月 25 日

香西備後守(香西記では元資)・香西備中守元直、応仁の乱の緒戦に細川勝元に従
って山名軍を攻む。(南海通記)

応仁 1 年 (1467) 5 月

香西氏、細川勝元の命により屋島・香西・直島・塩飽の浦を守る。(南海通記)

文明 18 年 (1486) 7 月 25 日

香西又五郎(蔗軒日録では孫五郎)、細川政元の幕府参賀に従う。(蔭涼軒日録)

文明 18 年 (1486) 11 月 27 日

香西五郎左衛門尉、細川九郎澄之の命により八条遍照心院の訴訟につき使者となる。

(蔭涼軒日録)

長享1年(1487)12月7日

香西五郎左衛門尉、細川政元の近江守護六角高頼討伐に従軍す。(蔭涼軒日録)

長享2年(1488)6月24日

香西五郎左衛門尉、將軍足利義政の普光院参詣に際し細川民部少輔に従う。(蔭涼軒日録)

長享2年(1488)10月23日

香西五郎左衛門尉、崇寿院領摂津国堺南庄代官職につき細川政元の使者として蔭涼軒へ出向く。(蔭涼軒日録)

長享3年(1489)7月3日

香西又六元長、細川政元の京都相国寺鹿苑院内の蔭涼軒参詣に従う。(蔭涼軒日録)

長享3年(1489)8月16日

香西元長・香西五郎左衛門尉、細川政元の犬追物張行に参加す。(蔭涼軒日録)

長享3年(1489)8月頃

牟礼・鴨井・行吉ら香西一党約三千人京都へ集まる。(蔭涼軒日録)

延徳3年(1491)3月3日

細川政元、東国へ赴く。香西元長ら伴衆騎馬14騎これに伴う。(蔭涼軒日録)

延徳3年(1491)5月4日

香西五郎左衛門尉、細川政元の使者として蔭涼軒へ派遣さる。(蔭涼軒日録)

延徳3年(1491)8月14日

將軍義材、近江守護六角高頼討伐のため出陣を決す。両香西留守衆となる。(蔭涼軒日録)

延徳3年(1491)8月16日

香西元長、細川政元に従い徳溪軒に出向く。(蔭涼軒日録)

明応1年(1492)3月28日

庄伊豆守元資、備中で備中守護細川勝久と戦い敗北す。元資方の香西五郎左衛門尉切腹し、五郎左衛門が讃岐より引き連れた軍勢も大半討死す。(蔭涼軒日録)

明応2年(1493)7月7日・8月23日・10月16日

香西元長、細川政元の犬追物張行に参加す。(蔭涼軒日録)

明応2年(1493)閏4月7日

香西備後守元資、八千余人の軍勢を率いて紀伊土丸城に籠る畠山政長の家人を攻む。
(南海通記)

明応6年(1497)4月28日

香西元長、和泉の堺で地下人と争う。(大乘院寺社雜事記)

明応6年(1497)10月10日

香西元長、山城守護代となる。(後法興院政家記)

明応6年(1497)10月25日

山城守護代香西元長、弟香西孫六元秋とともに山城に入部す。後法興院領の違乱の煩なきことを伝う。(後法興院政家記)

明応6年(1497)12月3日

香西元長、山城国の長福寺領を安堵す。(史料総覧)

明応6年(1497)12月15日

香西元長、醍醐寺の坊舎を破壊す。(大乘院寺社雜事記)

明応7年(1498)12月4日

香西元長、山科で蜂起した郷民に捕えらる。細川政元、安富・香川・薬師寺らに救出を命じ、11日元長山科より京へ帰る。(後法興院政家記)

明応7年(1498)12月17日

香西元長、賀茂社領に段銭を課す。幕府これを禁ず。(史料総覧)

明応8年(1499)8月14日

真如寺領河内国五箇庄代官香西某、当庄年貢を押妨す。(鹿苑日録)

明応8年(1499)10月18日

香西某、鹿苑院領撰津国の志宜庄を押領せんとす。(鹿苑日録)

明応9年(1500)7月25日

香西元秋の被官、安富筑後守元家の被官に殺害さる。元秋、元家の被官を攻む。細川政元、これを鎮む。(後法興院政家記)

明応年中(1492～1500)

香西備後守元資の子備中守元直、綾北条郡を本領とし丹波にも所領を有し在京す。これを上香西という。次子左近将監元綱、綾南条・香東・香西三郡を領して讃岐に在地す。これを下香西という。備中守元直の子又六郎元継、のちに備中守と号す。(南海通記)

永正1年(1504)2月19日

鹿苑院領山城国松崎郷代官香西某の又代官生夷某、同郷百姓に訴えらる。(鹿苑日録)

永正1年(1504)9月17日

摂津守護代薬師寺元一、細川政元を廃して養子細川澄元を立てんとし摂津の淀城に抛る。香西元長ら、淀城攻撃に向う。19日元長、元一を捕える。(後法興院政家記)

永正1年(1504)10月10日

香西元長、淀合戦の忠節と称して山城国に半済を行う。また従来免除されていた内裏公領の右京職巷所にも半済を課す(のち免除さる)。(宣胤脚記)

永正2年(1505)4月29日

香西元長、守護不入の地たる賀茂社領へ半済を課す。幕府、これを禁ず。(後鑑・史料総覧)

永正2年(1505)9月10日

香西元長、半済を拒んだ一乗寺・高尾を焼き払う。翌11日山科郷も焼き払おうとしたが郷民の抵抗に遇う。細川政元、元長を撃とうとして山科へ向ったため、元長、嵯峨に退く。(後鑑・史料総覧)

永正2年(1505)9月

香西元長、山城国に半済と称して課税す。(史料総覧)

永正3年(1506)2月19日

香西左近将監元綱、阿波の三好筑前守之長・讃岐山田郡植田一族(植田・池田・三谷・十河氏ら)の軍勢を防ぐため、香東郡太田郷に城を築く。細川政元、両軍の合戦を止めさす。(南海通記)

永正3年(1506)3月16日

香西元長、山城国の東寺領を押領す。(史料総覧)

永正3年(1506)9月7日

香西元長、細川政元に背く。政元、三好之長を奈良より召還す。13日元長、之長と京都で戦う。(史料総覧)

永正4年(1507)4月23日

香西元長、丹後守護一色義有を討つため軍勢を進めんとし、夫銭を賀茂社に課す。賀茂社これを拒んだため弟心殊院宗純を遣わして焼き払う。(史料総覧)

永正4年(1507)4月26日

香西元長、弟の元秋・彦六元能・宗純とともに細川政元の養子澄之に従い丹後へ出陣す。(細川大心院記)

永正4年(1507)5月25日

香西元秋・香西元能・宗純、細川澄之に従い加屋城攻撃に向う。28日澄之・香西兄弟ら、加屋城を攻む。城主石川勘解由左衛門尉直経と申し合い落城と称して兵を引き上ぐ。澄之丹波に抛り、香西兄弟嵯峨へ戻る。(多聞院日記・細川大心院記)

永正4年(1507)6月23日

香西元長、摂津守護代薬師寺三郎左衛門尉長忠と謀り、主君細川政元を暗殺す。(細川両家記。南海通記では香西備中守元継としている。)

永正4年(1507)6月24日

香西元長・香西元秋・香西元能、嵯峨より京へ向い、弟宗純・讃岐守護代香川上野介満景・安富新兵衛尉元顕の軍勢とともに、安富筑後守元家の館にいる細川澄元を攻撃す。澄元軍京を逃れ近江に向う。元秋・元能この合戦で死す。澄之、丹波より上洛し細川宗家を継ぐ。(細川大心院記・宣胤卿記)

永正4年(1507)8月1日

細川高国ら、細川澄之を攻む。澄之切腹し山城守護代香西元長・弟宗純・香西五郎左衛門尉・香西藤六・香西宗次郎弟ら香西一族を始めとして、香川満景・香川肥後守・安富元顕・前田彌四郎・三野五郎太郎らの讃岐勢や薬師寺長忠ら討死す。2日細川澄元、細川宗家を継ぐ。(細川大心院記・多聞院日記・宣胤卿記)上香西家断絶す。(香西記)

永正4年(1507)12月

香西元長の残党洛中で蜂起す。(宣胤卿記)

永正4～5年(1507～8)

香西左近将監元綱・子豊前守元定、大内義興の命をうけ前將軍義材の帰洛に従う。(南海通記)

永正5年(1508)4月9日

細川高国上洛の風聞あり。香西孫五郎国忠・香川平五元綱ら、細川澄元から離反して高国につく。この日細川澄元、三好之長とともに近江甲賀に逃る。5月6日細川高国、細川宗家を継ぐ。(瓦林正頼記)

永正5年(1508)8月

香西元定、香西備前守清成・植松四郎資茂らを率い三好方についた山田郡の植田一族を攻む。(南海通記)

永正15年(1518)8月

大内義興の京より周防への帰途に際し、香西某、備前児島に出迎う。(南海通記)

永正17年(1520)2月16日

細川高国、摂津で細川澄元と戦う。高国方の香西與四郎、澄元方の三好孫四郎と渡合い太刀打す。(細川両家記)

大永6年(1526)7月12日

香西四郎左衛門元盛、細川典厩尹賢の細川高国への讒言により自殺す。(細川両家記)

大永6年(1526)10月21日

香西元盛の兄丹波の波多野植通・柳本賢治、細川尹賢を討つため細川晴元と通じ丹波の八上城・神尾城に拠る。(細川両家記)

享禄1年(1528)12月

大内義興、病死す。香西豊前入道宗玄(元定の法名)、是竹山に大内堂を建て義興の像を安置す。(香西記)

天文6年(1537)5月7日

香西三郎次郎宗徹、鹿苑院へ招かる。(鹿苑日録)

天文8年(1539)6月27日

香西七郎左衛門、子寿香の喝食名取の礼として二百銭を鹿苑院へ持参す。(鹿苑日録)

天文16年(1547)7月

香西與四郎、細川晴元の臣三好豊前守長慶に属して摂津に陣す。(細川両家記)

天文18年(1549)1月5日

香西七郎左衛門、礼として百銭を鹿苑院へ持参す。(鹿苑日録)

天文18年(1549)2月

細川晴元と三好長慶の争いに際し、香西越後守元成、香西備後守らを率いて摂津に至り晴元方につき中ノ島城を保守す。(南海通記)

天文18年(1549)3月

香西元成、千余人を率いて摂津の三宅城を攻略す。(南海通記)

天文18年(1549)5月2日

細川晴元方の香西與四郎、三好長慶方の摂津の芥川城を攻む。香西軍敗る。(細川両家記。史料総覧では香西與四郎を香西元成としている。)

天文末年

香西元成、細川晴元を離れ三好長慶につく。(南海通記)

永禄1年(1558)9月

香西元成、三好實休に従い香川五郎刑部大夫景則を攻む。景則、元成の仲介により實休と和睦す。(南海通記)

永禄3年(1560)10月21日

香西元成、山城の炭山に拠り河内の安見直政を援く。この日元成討死す。(史料総覧)

永禄3年(1560)頃

香西駿河守元載(又は元清)、三好方の軍勢として摂津の桑田に至り畠山高政軍と戦う。(南海通記)

元龜2年(1571)8月

香西伊賀守佳清(好清ともかく)、三好方の命により摂津の福島城に拠り織田信長の攻撃を防ぐ。(香西記)

元龜2年(1571)中

香西駿河入道宗信(心)(元載のこと)、備前児島の賀陽城を攻む。霧のため宗信戦死す。宗信子香西佳清、香西家を継ぐ。以後香西家、佳清とその弟千虎丸の二派に分れる。(南海通記)

元龜年中(1570~72)

香西勢、三好存保の命により織田信長方の綾北条の香川民部少輔を西庄城に攻む。(南海通記)

香西宗信、成就院神宮寺を再建す。(般若院又は成就院宮の坊という。)(香西記)

天正2年(1574)10月

香西・香川、三好長治の大内郡四郷横領を抗議す。長治、香西氏を佐料城・勝賀城に攻む。(南海通記)

天正3年(1575)

香西佳清、香川兵部大夫之景の那珂郡の金倉顯忠攻撃に援軍を出す。(南海通記)

天正4年(1576)

香西佳清、香川之景とともに使者を織田信長の下に派遣し信長の幕下となることを願う。信長、これを許す。(南海通記)

天正6年(1578)1月

香西備前守、千虎丸を香西佳清にかえて立てんとし佳清の執事香西大隅守・植松備後守を殺す。香西備前守、備前の中ノ島に流さる。のち召還さる。(南海通記)

天正6年(1578)夏

香西佳清、長宗我部元親の阿波侵攻に対する三好存保の求めにより香西備前守・子六郎大夫を阿波の勝瑞城へ派遣す。重清の戦いで備前父子戦死す。

香西佳清、同族羽床伊豆守の女を離別す。羽床伊豆守、香西氏から離れ綾南条・綾北条の二郡を押えて自立せんとす。(南海通記)

天正7年(1579)3月

羽床伊豆守、香西佳清の臣の福家七郎父子殺害を怒り香西佳清を攻む。(南海通記)

この年香西佳清、藤尾八幡宮を是竹山に移し藤尾山に城を築く。(香西記)

天正10年(1582)8月5日

長宗我部軍、香西佳清を攻む。香西太郎左衛門尉(香西大隅守の子)・香西縫殿助・瀧宮豊後守ら、これを防ぐ。のち香川之景の仲介により和睦す。(南海通記)

天正10年(1582)8月

香西佳清、長宗我部軍の山田郡の十河城攻撃に香西加藤兵衛らに千人余の軍勢を率いて従わす。(南海通記)

天正13年(1585)6月

香西佳清、豊臣秀吉の四国征討にあたり西長尾へ逃る。香西家廃絶す。(香西記)
香西備前守一族、三谷伊豆守一族とともに出雲へ赴く。香西縫殿助、姫路藩主池田輝政に三千石で召抱えらる。(南海通記) 香西備前守の子香西太郎右衛門、越前藩主松平秀康に召出され、香西縫殿助の子香西茂左衛門守清、松江藩主松平直政(秀康三男)に仕え二千五百石を与えらる。(桃裕行論文)

天正15年(1587)8月

香西佳清の家人、国中に徘徊す。(南海通記)

Ⅶ 藤尾城と宇佐神社について

藤尾城

高松市香西本町の中程に、高さ30m程の小山があり、その頂上に香西氏が崇拜していた、宇佐八幡神社が鎮座している。この山が藤尾山であり、昔の藤尾城跡である。社伝によると、この神社は嘉禄年中（1225年～1227年）に、香西左近将監資村が勧請したという。資村は中御門中納言藤原家成の後裔で、承久の乱の時活躍して功績があり、讃岐国で香川・阿野（あや）の二郡を与えられたという。以来、18代365年間にわたり讃岐の豪族として栄えた香西氏は佐料に居館を構え、西方勝賀山の山頂に要害城を築いていた。時は戦国時代をむかえ、香西氏18代佳清のとき、天正3年に神社を西側の上の山に移し、同5年から神社の鎮座していた所へ、佐料の居館を移し、藤尾城と呼んだという。そのころ長曾我部元親が阿波国に侵入し、三好長治と戦っていたが、その元親がさらに讃岐にも侵入してくるとの風説があり、香西氏では中国地方の宇喜多氏や、毛利氏などに協力を求め、長曾我部の侵攻に備えたのである。そうすると北部の海岸に近いこの藤尾の地に、築城し居住することが有利であると考えたのであろう。このことは、江戸時代の後期寛政2年（1790年）に、香流軒藤原直矩が編集した、「香西雑録」に次のような、「香西藤尾八幡来由記」と題した一文が記載されているので、知ることができる。

香西藤尾八幡来由記

抑（そもそも）藤尾八幡宮は、人皇八十五代後堀河院の御宇嘉禄年中、阿野・香川郡の領主、讃の藤氏香西左近将監資村、これを勧請し奉る也。資村嘗ておもえらく、当地擁護のため宇佐八幡を勧請し、以て敬崇せんと。すなわち豊前宇佐宮に、事の由を告げ、則ち神職の士領掌す。神楽を奏し以て恭しく神慮を窺い、即ち感応あり、神輿を調え神霊を遷し以て神人楽人等を依屬し、共に相送り来る。ここに海路遠く、時に神船風に順じ、数日を経ずして当国生島浦に着く。（後名付て此所を宮の浦と言う）生島浦の南壇上原に仮宮を造り、以て暫らく神輿を移す。即ち神饌を献じ神楽を奉り、以て神慮を慰む。人々船中の労苦を安じて後、漸く行路御幸の列を整え、装束を繕い（後この所を名付て装束所と言う）、御先拂いの旗・鉾・弓・矢軽卒兵杖を帯びる者等これを携え、青幣白幣神人これを持ち、伶人乙女神楽男職を掌り、祠宮祝部神輿に

従い、警固の土前後に従い、すなわち藤氏の族相共に奉じて、警衛を為す也。行幸の列正整し、竟に根香・勝賀二山の間を越え（これを名付て通谷と言う）、燧（ひうち）坂を下り、上居（かさい—今の笠居）郷山口邑藤尾原に至る。此の処に於て神籬（ひもろぎ）を建て、遂に神霊を鎮め、以て四海泰平武運長久当郷擁護の神藤尾八幡と敬崇し奉る也。後其地辺を以て神領田（此地を神高と言う）となし、以て祭祀を行なわしむる也。爰（ここ）に佐料（古、讃綾…さりょう…と言う也）城北十余町に当り、海浜に景地の小山有り、東南及び北海入り、西是竹山に続く、これを磯崎山と謂う。（後改めて藤尾山と号す也）請（おもえらく）是れ後世変らず、必ず繁栄の祠所ならん乎。即ち地を南面に開き、堤を以て海潮の出入を決し、これを御幸道となす。数年を経ずして事成る也。依て此山に鎮座し奉る。時に崇敬光を減ぜず、祭祀毎歳八月十五日を以てこれを行なう。新穀新醸の豊酒を献ず。郡邑の男女群をなし、信を致す也。御幸還幸の式、宮社の僧侶及び神官巫祝、各其職事を掌り、伶人楽を奏し社務等神輿に従う。すなはち藤氏の族誠心して礼服を粧い、以て供奉を為す。警固の土列を正し、行粧嚴重にして、且豊凶の年を論ぜず、奢らず儉せず、連綿として茲に至る也。積年三百五十有餘年（自嘉祿より天正に至る）土佐州長曾我部宮内大輔元親兵を起し、而して永祿元亀中嘗て土州七郡を治す。乃ち天正年中將に隣国に発向せんとする時、香河郡司香西伊賀守好清の佐料城、平陸にして山河の固め無し。依て八幡宮を是竹山の内上の山に移し、以て藤尾山に築城す。天正七年城成り、而して移居す焉。隍 皇味だ尽く成らず矣、天正十年土佐の兵乱入、すなわち伊賀守会戦して屢、これを相拒（こ）ぐ。時に西讃岐の香川山城守信景、和儀を整え、好清以て竟に元親に与（くみ）す。後天正十三年羽柴公の四国征伐に方（あた）つて、香西氏の城邑を廃去し、君臣離散、既に断絶して後、城楼塙隍破壊し、遂に滅亡する也。所請社地を廃し以て壘を築く也。神豈（あに）感応有ん哉。世人これを畏怖すと云々。爾して後慶長年中、八幡宮を旧地に復遷し奉らんと欲し、乃ち香西氏の餘族植松彦太夫往由入道浄光、中興願主となり、而して香西金吾光順入道休弥及び、香西惣十郎往忠、植松左衛門資信、片山九右衛門某、其外新居香西植松、支流の佐藤・竹内・諏訪・渡辺・四宮氏の族等、各愴々同志、復瑞籬を藤尾山に立て、八幡宮を鎮崇し以て笠居郷擁護の神と尊敬し奉る也。因て如在之祭祀振古のごとく之を行。而して今に至る。自慶長至寛政百九十四年也矣。物易り星移ると雖ども、神威弥々耀（カカヤ）き、萬世不易、丹心抽を誰か神徳を仰ぎ奉らざらん哉。茲に古縁起有り者、即ち宝庫に蔵す。而して後依て以て衆人これを

嘲り省りみず、今爰に寛政二歳庚戌六月朔日之を記す者也。 香流軒藤原直矩
とある。この藤尾神社には、金亀山五大院神宮寺と呼んだ別当寺が建ち、仏道でも崇敬礼拝していたことが、次の由来記によって、知ることができる。これも前記の香西雑録に次のように書かれている。

香西金亀山五大院神宮寺由来記

当寺は人皇五十二代嵯峨天皇の弘仁年中、弘法大師の開基。本尊不動明王は則ち大師御真作なり、昔時当国の大領綾公の草創也。景行帝三代、讃岐国造武明（卯）王より五世、綾日向王の六世の裔、大領綾公大山麻呂の草創、故に後代々の綾氏之を修補す。始め海岸山成就院と号す。沂（さかのぼ）て其濫觴を尋るに、海師四国経回の時、当郡香河の辺地に次舎し給ふに、或夜夢見に、異人來り告て曰く、我此北海の靈地の岸に到て、海陸衆生を守護する事茲に年あり。汝庶幾（こいねがわくは）彼の地に我形像を安ずべし。然らば彭（かみがしら）に万願の利益を施し、二世を速に救はんと欲すと。明かに示し畢て北方に去る也。是を回顧すれば、不動の尊形顕々たり。茲に即夢覚め給ひ、因て以て海師奇異の思をなし、歡喜踊躍して、翌朝当地磯崎山の辺りに到れば、靈地誠に瑞夢の如し、自ら尊形一軀を彫刻し給ふ。不動明王是也。数年経て保安年中中国司中納言藤の家成改めてこれを作る。其後承久年中香西左近将監資村、阿野香川を領し、当郷に居城し之を信ずる也。爾後神籬を磯崎山に建て、山口邑の藤尾八幡宮を爰に移し、鎮め奉りて、藤尾山と改号し、不動寺を以て宮寺とし神宮寺と改め、宇佐の三山亀山を准らへ、金亀山と号す。藤尾山一名金亀と謂う也。文和・延文年中也。四国管領細川頼之是を再興す焉。爾後享徳年中香西備後守元資再興也。又其後元龜年中駿河入道宗信再建し、般若院、又成就院、又宮之坊と云う也。天正年中香川の領主香西伊賀守佳清、八幡宮並びに坊舎堂宇を上の方に移し、再建して藤尾山に新城を築き、佐料城を廢して爰に移り居る。天正十三年秀吉公四国征伐に方り、城邑廢去し城楼隍壘既に敗蹟滅亡せり、爾後慶長年中、後復旧地藤尾山に神社仏宇を移して、本尊不動尊を五大尊に准えて、五大院と号し、宮社寺坊再興なしける。

宇佐神社の石鳥居

旧藤尾城の登り口の、宇佐神社本社へ登る石段から南へ約 250 m 程行った所に、宇佐神社のお旅所がある。このお旅所に花崗岩製の石鳥居が立っている。

高さは中央で地上 3.03 m を測り、柱は丸柱で下端で直径が 41 cm 程あり、両柱の間は、下端で柱の中心から中心までを測ると、254.5 cm ある。また柱はやや強い転びがあり、下方が広がり上部が次第に狭くなっている。両柱の上には高さ 12 cm で、柱より 4.5 cm 太い大きい台輪が乗り、柱の下端には上面が丸形の台石があり、柱は次第に上部の間隔が狭くなり、傾斜させて、ふんばりを持たせている。両柱の上には 1 本の石で方形の島木と、中央上部を三角形にした笠木を作って載せている。そしてその両端が外方に延びている。島木から 31 cm 下方に上下の幅 19 cm、厚さ 9 cm の貫（ぬき）が両柱に通る、その両端が柱から外に、上下幅 18 cm、厚さ 17 cm の貫（ぬき）が、外側から 52 cm 柱から出たように入れられている。貫の上の額束は欠失している。島木と笠木の高さは 30 cm を測る。この鳥居はこのように太い柱に厚い島木笠木に反りが少ないなど古式を示しているが、室町時代の頃のものと思われ、本県では小豆郡豊島家浦の八幡神社鳥居、香川郡直島八幡神社鳥居などと共に古式のすぐれた石鳥居に数えられるものである。

图

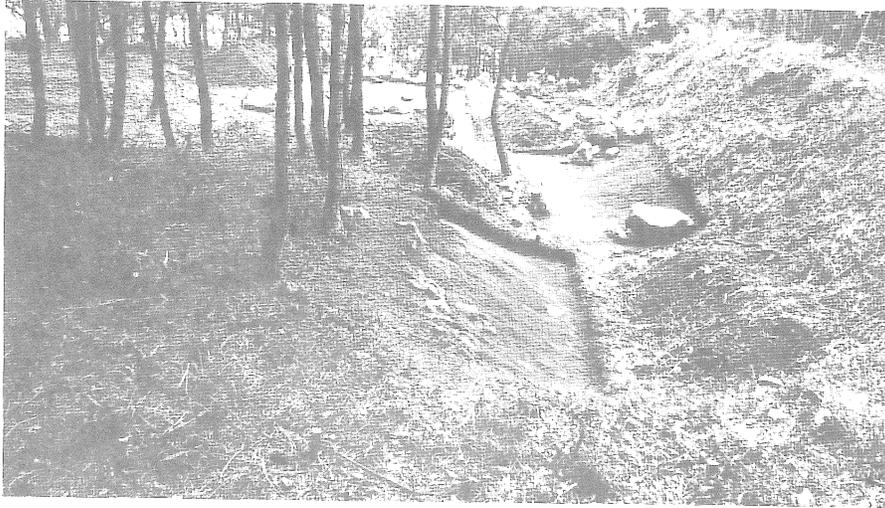
版

図版 I

(1) 空堀調査前全景



(2) 同調査後全景



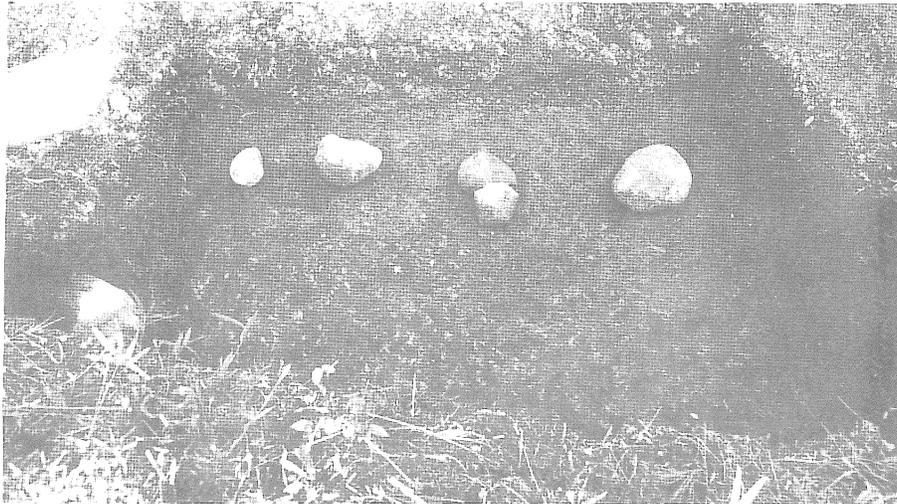
(3) I-1 調査区発掘作業風景



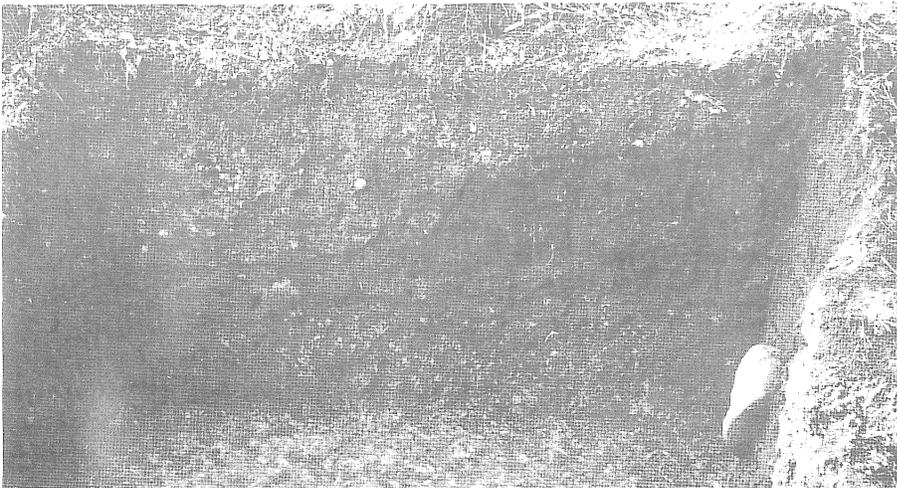
(1) 本丸土塁崩壊部分



(2) 同掘部列石検出状況



(3) 同土層序(左右の土質の違いに注意)

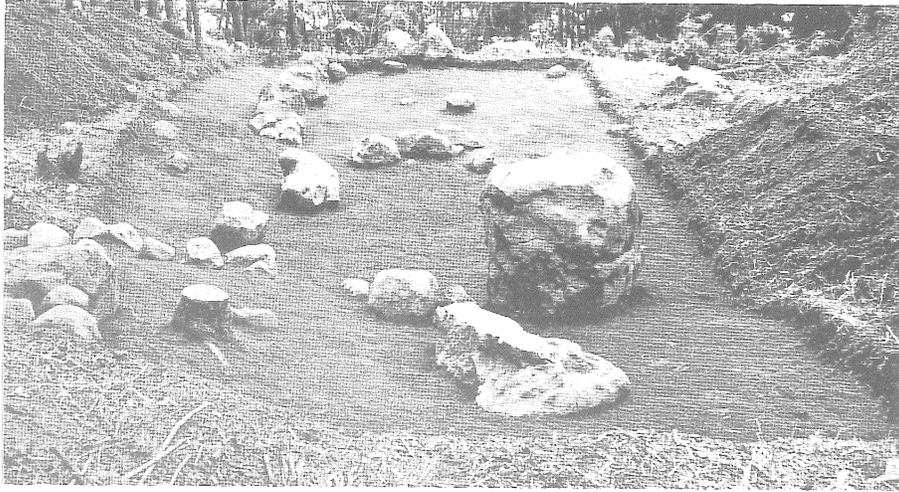


図版 3

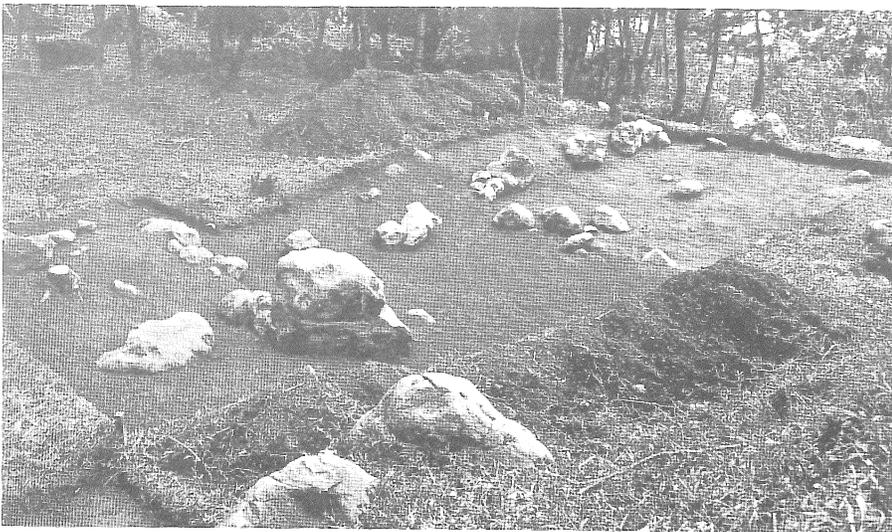
(1) 土塁先端部石組み



(2) I・I'・2・3 調査区試掘状況(北西より)



(3) 同(西より)

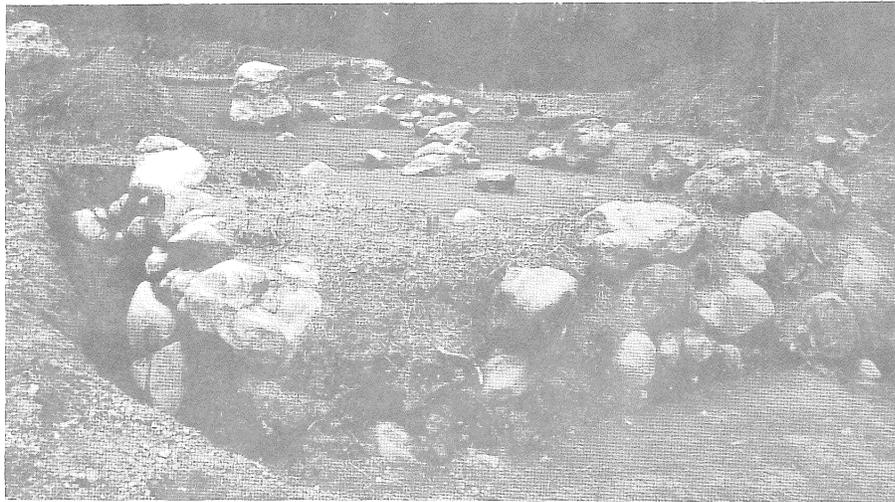


図版 4

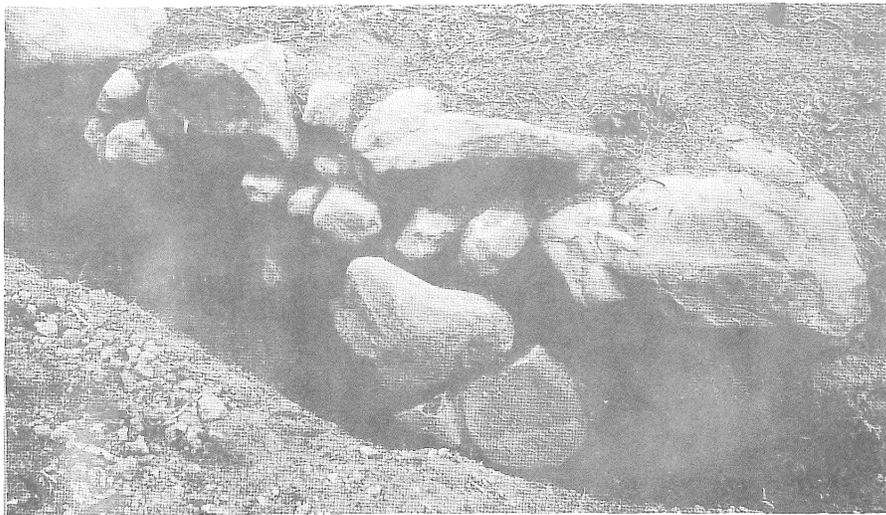
(1) コ字形石組み調査前全景

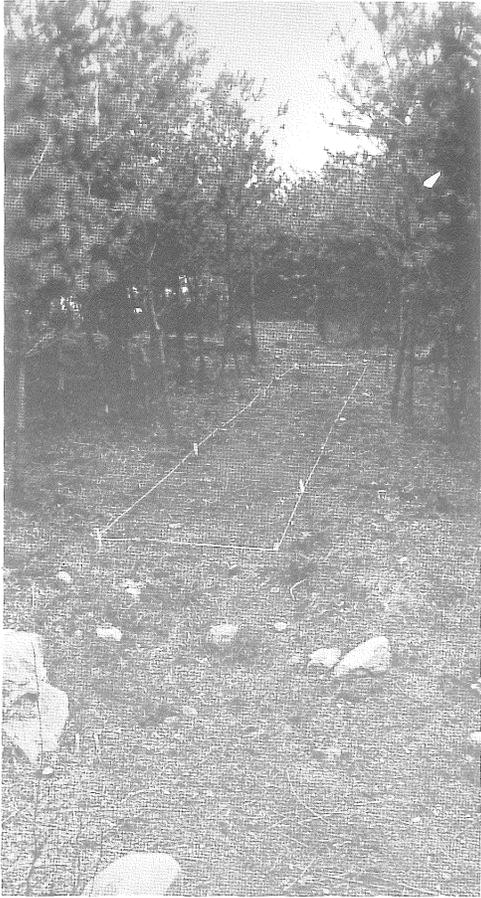


(2) 同調査後全景



(3) 同下部(南より)





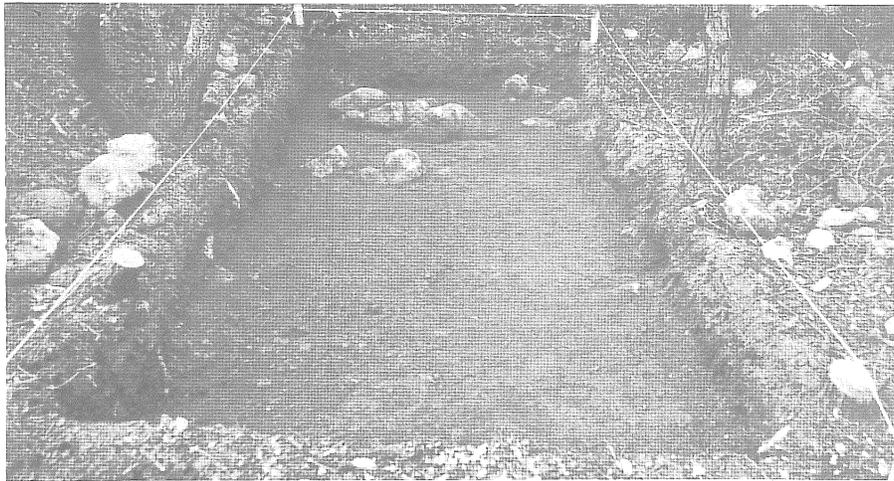
(1)	(2)
(3)	

- (1) Ⅱ調査区の設定（南より）
 (2) 同第Ⅰ層除去後全景（南より）
 (3) 同調査終了状況（北より）

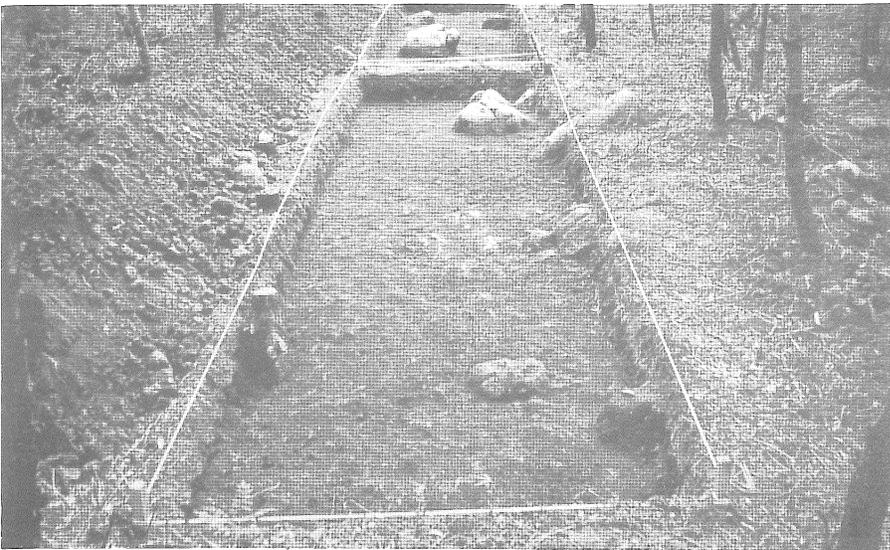
図版 6



(1)
II-1 調査区試掘状況



(2)
II-1A 調査区試掘状況



(3)
III-1.2 調査区試掘状況(北より)

図版 7

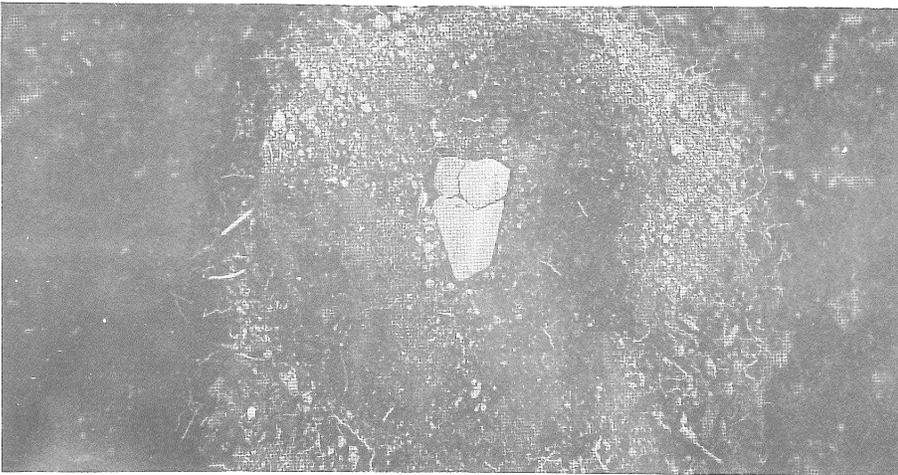
(1) 遺物出土状況 (Ⅱ-2 調査区)

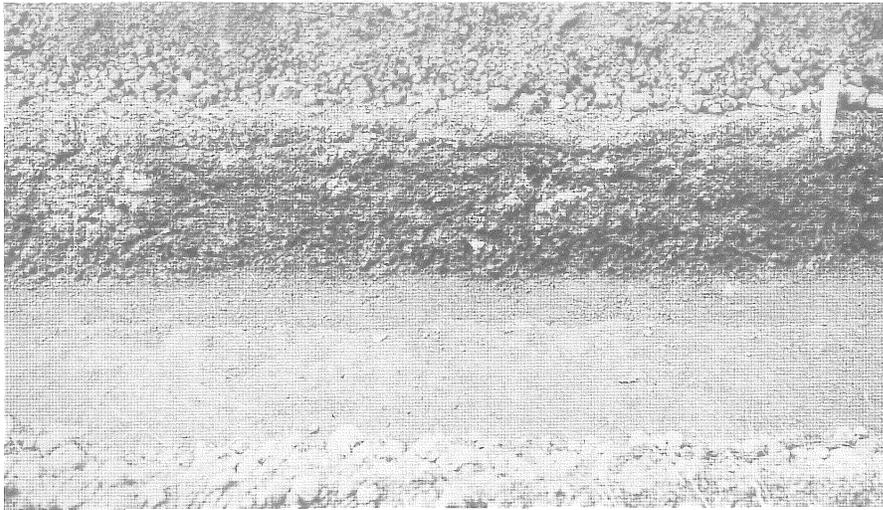


(2) 同 (Ⅱ-2 調査区)



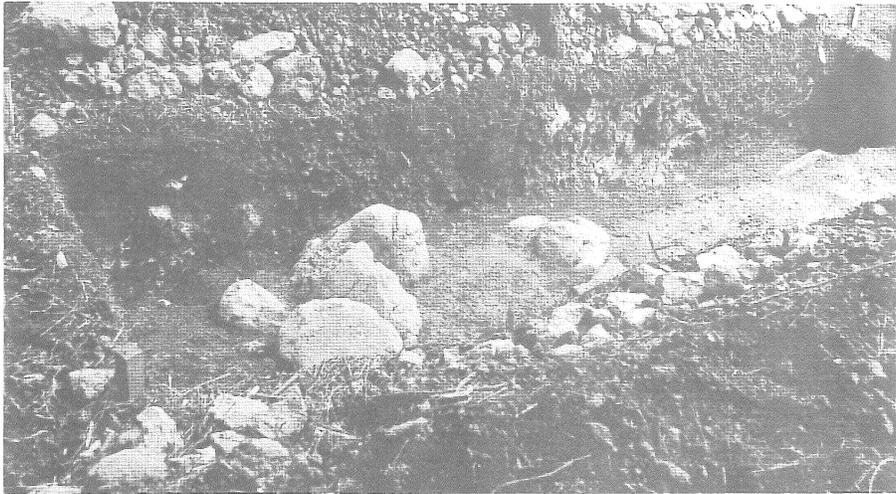
(3) 同 (Ⅲ-1 調査区)





(1)
II-1 調査区土層序

(2)
II-A 調査区土層序



(3)
埋め戻し作業風景

図版 9

(1) 本丸内井戸跡推定地

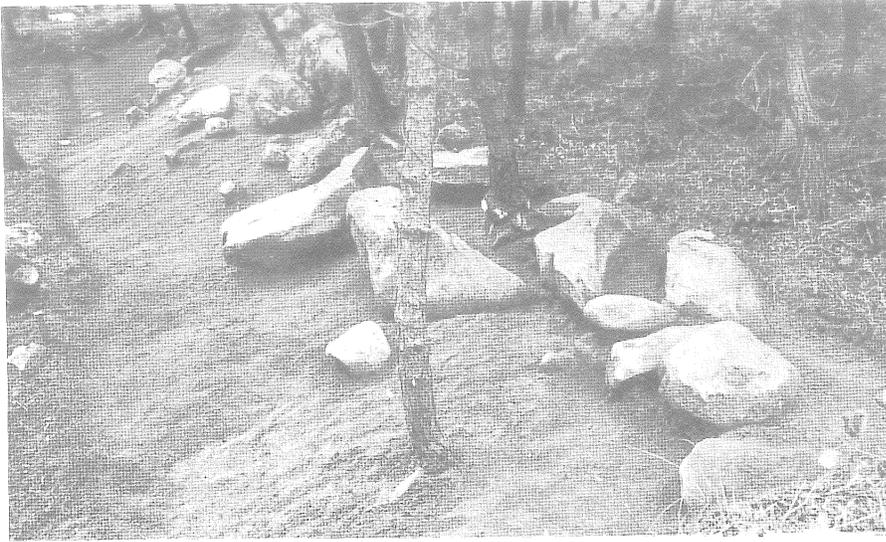


(2) 同底部



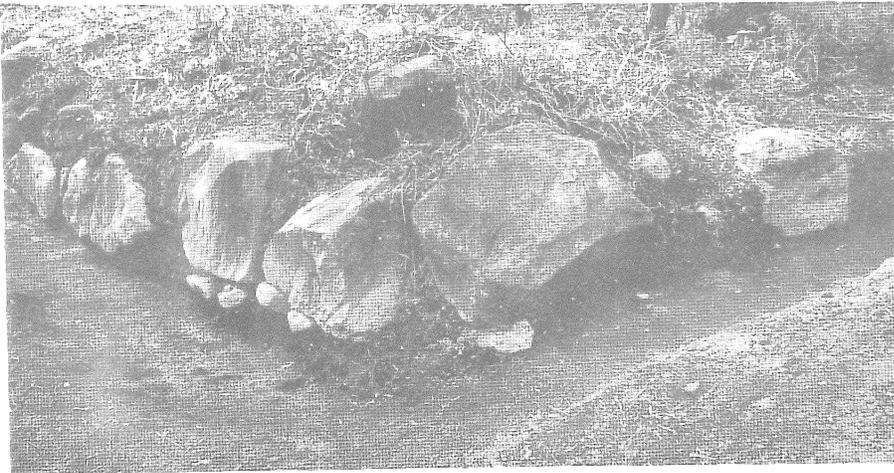
(3) 同発掘状況





(1) Ⅰ調査区西上辺の石群

(2) 同東辺の石塁



(3) 同北東隅の石塁

図版II

(1) I調査区北辺の石塁(北より)



(2) II調査区東辺の石塁(東より)



(3) 二の丸西部の石塁(西より)

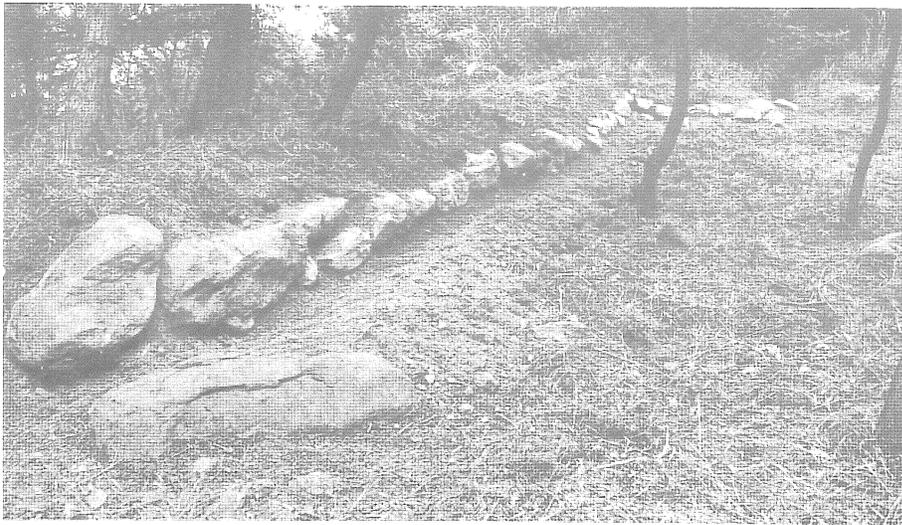




(1) 二の丸西部の石塁（北より）



(2) 二の丸二重目土塁にみられる腰巻石垣
(第33図)



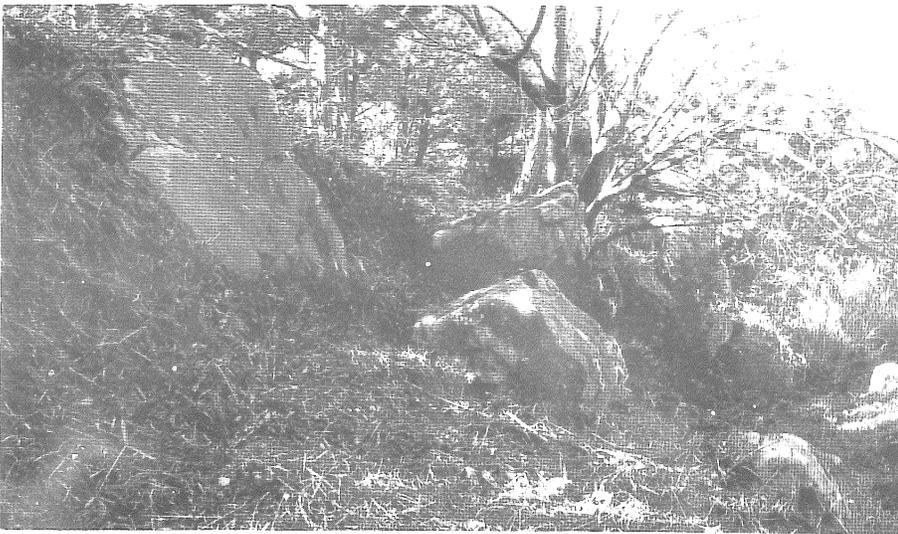
(3) 同 (第33図)



(1) 二の丸二重目土塁にみられる腰巻石垣
(第33図)



(2) 二の丸二重目土塁にみられる腰巻石垣

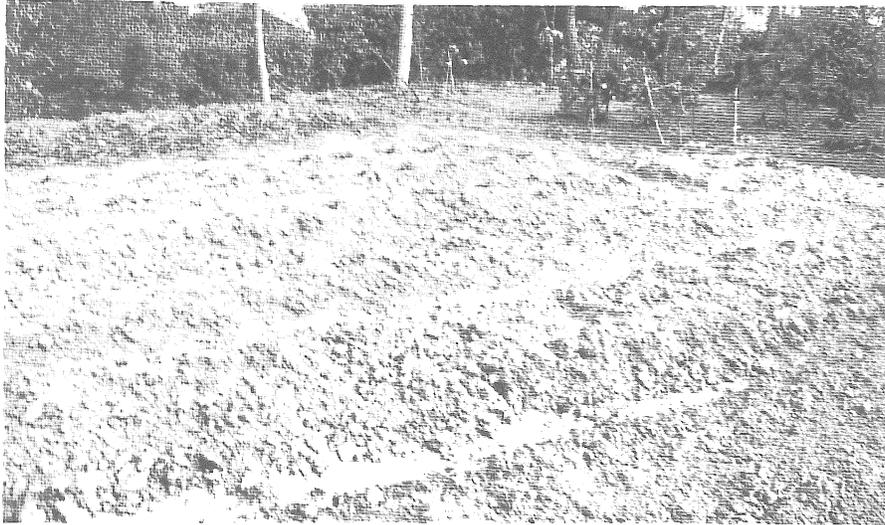


(3) 同外側部分



(1) 佐料城跡に残る堀跡

(2) 作山城跡頂部平坦面



(3) 藤尾城跡（現・宇佐八幡宮）

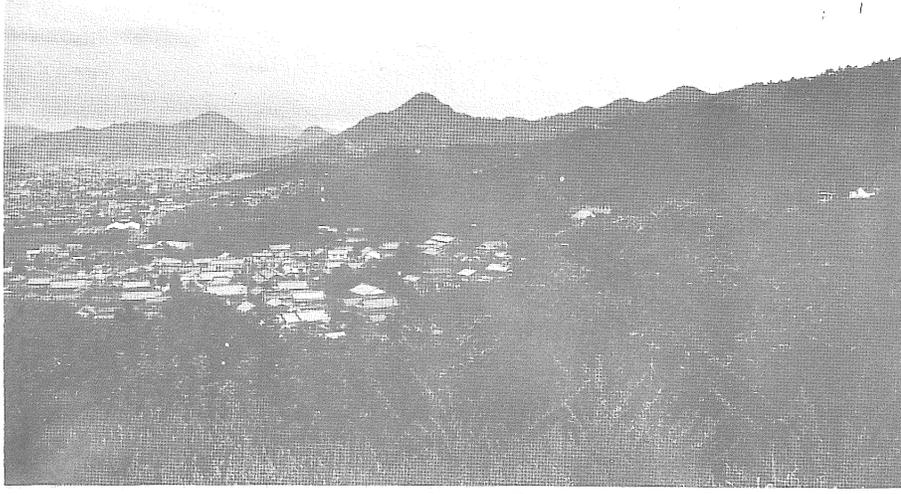
(1) 芝山城跡を南より仰ぐ



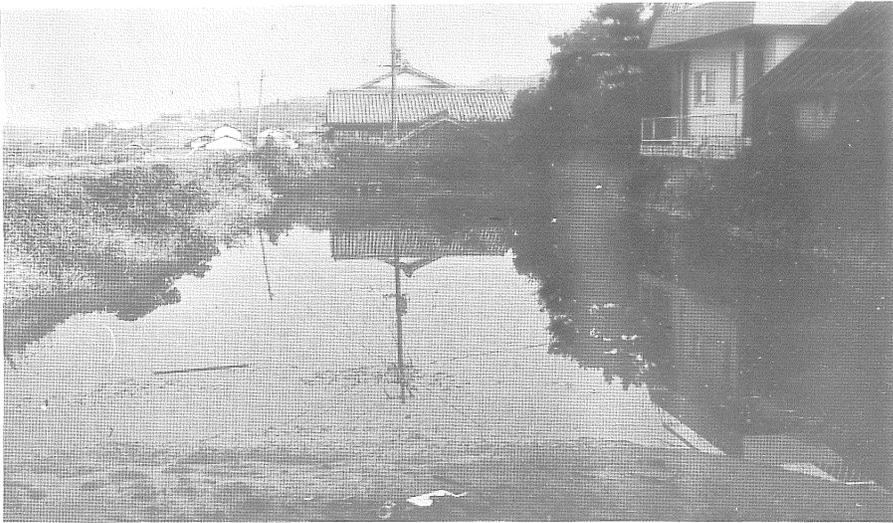
(2) 植松城跡 (西より)



(3) 袋山 (鬼無城跡推定地) を勝賀山より望む (中央円錐形の山)



(1) 中山城跡の堀東部



(2) 同西部（中央部埋立て）

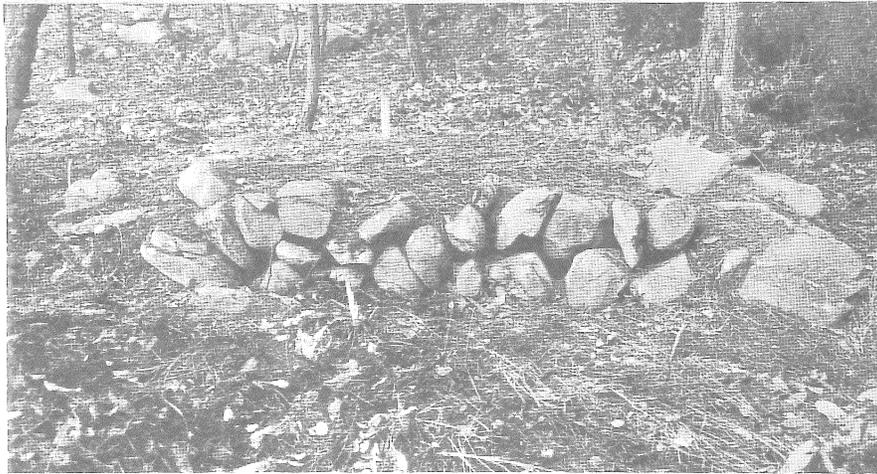


(3) 同南側石垣





(1) 黄峰城跡南端削平地



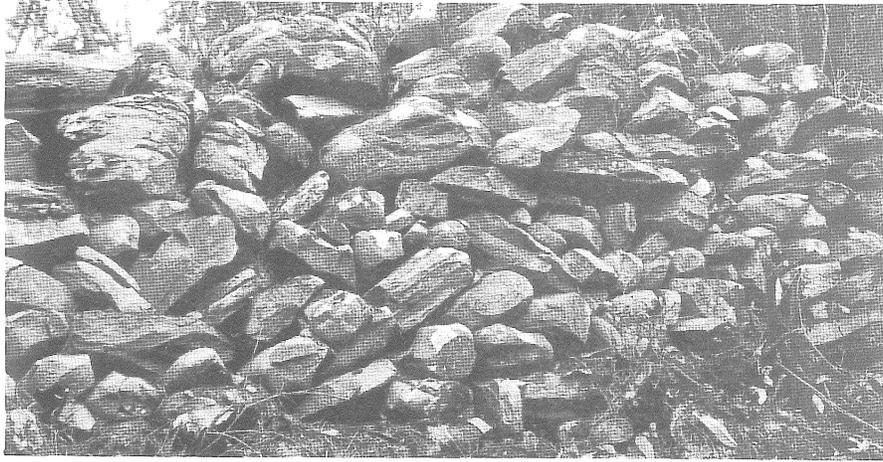
(2) 同所にある矩形石組み



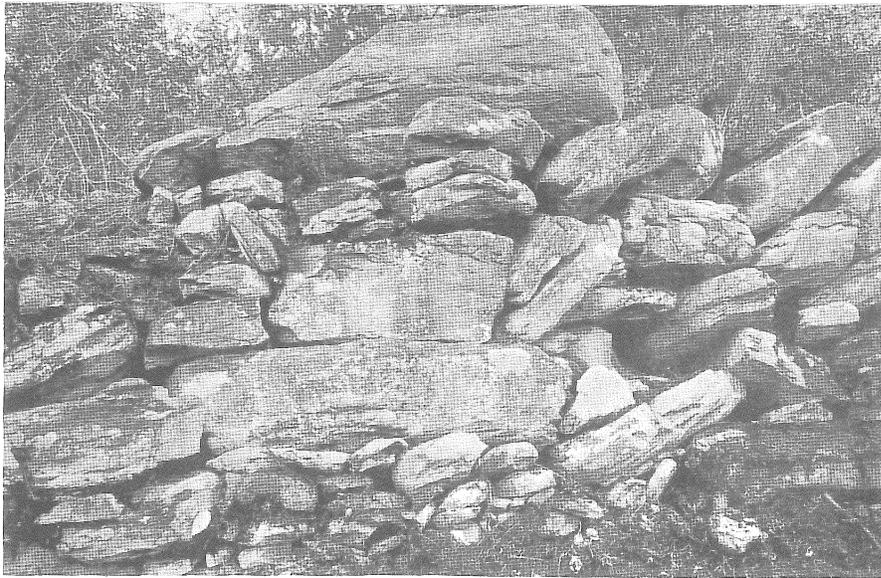
(3) 同所上部の石臺



(1) 黄峰城跡の西側石塁



(2) 同東側石塁



(3) 同石塁南東部

(1) 黄峰城跡の西側石塁

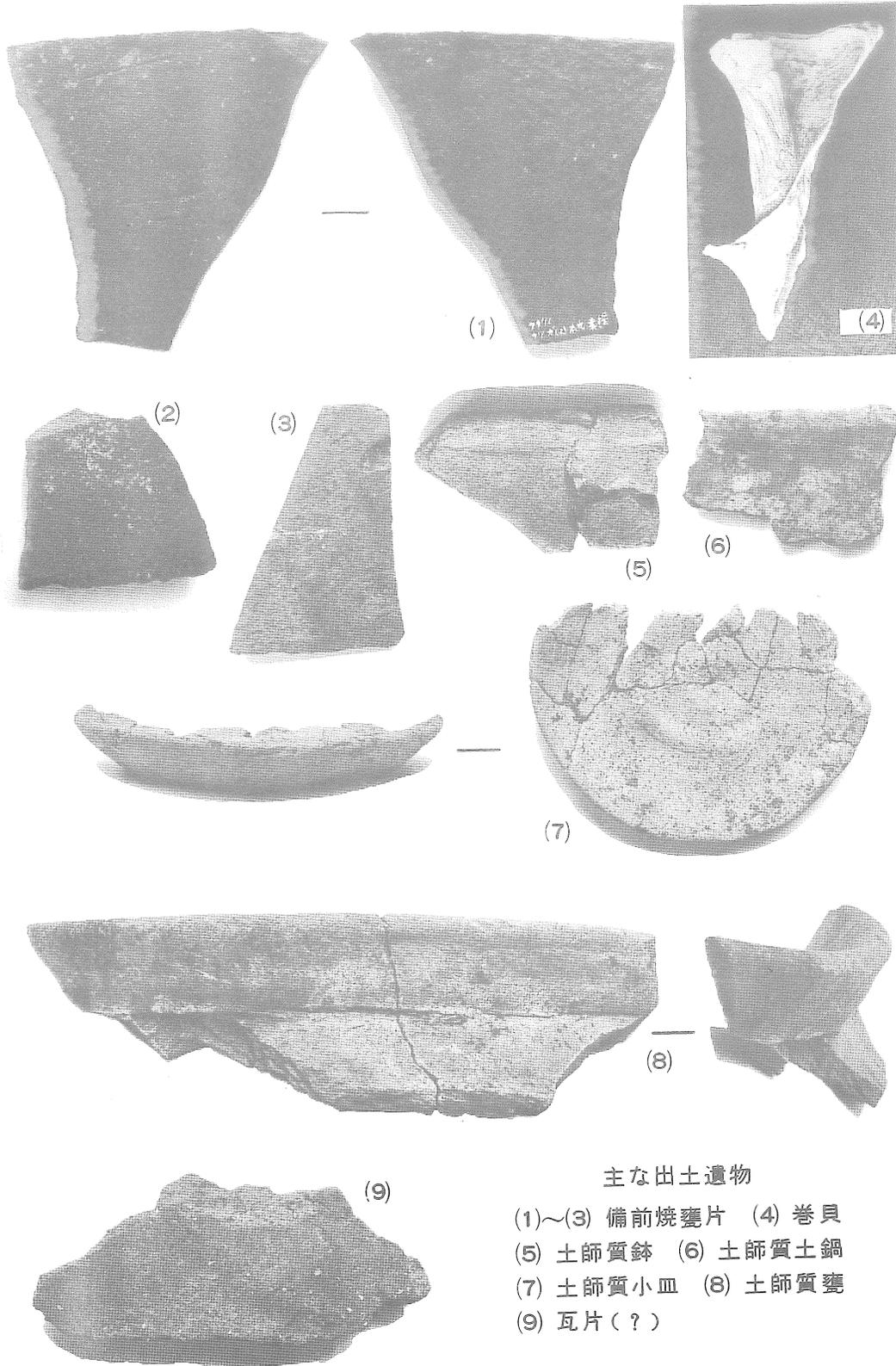


(2) 同本丸土塁遺虎口



(3) 同北端群石部





主な出土遺物

- (1)~(3) 備前焼甕片 (4) 巻貝
- (5) 土師質鉢 (6) 土師質土鍋
- (7) 土師質小皿 (8) 土師質甕
- (9) 瓦片(?)

勝 賀 城 跡 II

1980年3月印刷発行

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町1丁目8番15号

印 刷 河 端 商 会

高松市新田町若宮 (代) 41-4195